

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Can the Piazza substitute for the Politics?: Rethinking of the outdoor life in Italy

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇田川, 妙子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004018">https://doi.org/10.15021/00004018</a>

## 広場は政治に代われるか —イタリアの戸外生活再考—

宇田川 妙 子\*

Can the *Piazza* substitute for the Politics?:  
Rethinking of the outdoor life in Italy

Taeko Udagawa

イタリアでは近年、社会運動が急激に盛んになりつつある。その背景には、当然、イタリアがかかえている複雑な社会問題があるが、筆者の関心は、それが、広場という戸外での行動という形で表出されているという点にあり、ここには彼らの日常的な戸外生活との連続性を見ることができる。本論文は、激変するイタリア社会の現状を今後適切に考察していくためにも、この戸外生活（広場のみならず路地も含む）で展開されている社会関係について積極的に考察していこうとするものである。

その際、筆者は、従来のように戸外生活の機能や目的を早急に明らかにしようとする手法はとらない。戸外とは、目的のいかんにかかわらず、誰もが集まってきて出会うことができる場でもあるからである。そして、その場面で彼らの様々な行動に微細に注目していくと、そこには「[他者] 同士の関係」という言葉で表現される関係性があらたに浮かび上がってくる。これは、人々を異質なまま共生させる原理を内包した関係である。本論文の主眼は、こうした関係の存在が、これまで「無秩序」と言われてきたイタリア社会をどう書き換えていくことができるのかという可能性を提示することにあるが、最後に、この関係が社会理論一般に対しても重要な意味をもっていることにも付言していきたい。

These days in Italy, we can see the rapid growth of social movements. Certainly this means that Italian society has a lot of serious and complicated social problems. But my concern in this article is that their protest actions almost always appear out of doors, especially in the *piazza*, so that we can

---

\*国立民族学博物館民族文化研究部

**Key Words** : other, *piazza*, outdoor life, public, Italy

キーワード : 他者, 広場, 戸外生活, 公共, イタリア

understand these as a continuation of their ordinary outdoor life. Here I attempt to examine the relationships they create and activate out of doors; not only in the *piazza* but also in alliances. This will be very helpful to further analysis of social movements.

Most previous studies about Italian outdoor life have had a very functional point of view, but this is not mine. I pay attention to another aspect of the outdoors; outside anyone can gather and meet regardless of his/her own purpose or interest. By examining their behavior in this aspect, we will explore *the relationship between 'others'*. This is a very interesting and suggestive relationship, because it contains the principle of commensurability among others. This article tries to show that the concept of this relationship forces us to reconsider Italian society, which has been imaged as disordered for a long time, and also helps in rethinking social theories in general.

1 はじめに	3.2 抗議行動の形式性
1.1 イタリアの活発な社会運動	4 戸外に現われる「あなた」と「わたし」
1.2 問題の所在	4.1 挨拶とジェロ
2 イタリアの戸外空間	4.2 身体表現
2.1 広場	4.3 キアッキエラ
2.2 路地	5 「他者」同士の関係
2.3 戸外生活の諸相	5.1 共生の場としての戸外
3 戸外のもう一つの側面	5.2 「無秩序」とは
3.1 Aの抗議	5.3 もう一つの付言

## 1 はじめに

### 1.1 イタリアの活発な社会運動

「広場は政治にとって代わることはできない。」<sup>1)</sup>

近年、イタリアでは、(特に市民運動という範疇に入れられるような)社会運動の機運が急激に高まりつつある。もちろん社会運動の活性化傾向そのものは、世界的な動向だが、イタリアの昨今の活気には目を見張るものがある。

たとえば一昨年(2002年)の1年間を取ってみても、2月23日、10年前の汚職摘

発事件を契機に始まった「マーニ・プリーテ」<sup>2)</sup>を記念する集会在ミラノで4万人(以下、数字は主催者側発表)を集め、3月23日にはローマで、労働組合が全国から300万人を動員して労働者憲章改正に対する抗議を繰り広げた。また、5月12日、中東での戦争中止を求めるペルージャ・アッシジの平和行進<sup>3)</sup>に8万人が参加し、7月20日、反グローバルを掲げる「イタリア社会フォーラム」<sup>4)</sup>の呼びかけによってジェノヴァに10万人が集結した。それは、前年のジェノヴァ・サミットでの犠牲者<sup>5)</sup>の追悼の意も込めた反グローバルの示威行動であった。そして9月14日には、この年、司法改正論議から端を発した「ジロトンディ」という名の運動<sup>6)</sup>が、ローマに約40万人を集めて改正反対を訴え、11月、フィレンツェでは反戦デモが100万人規模で行われた。当日は、いわゆる反グローバルの世界的組織である「世界社会フォーラム」のヨーロッパ支部「ヨーロッパ社会フォーラム」の大会が開催された最終日でもあった。ちなみに昨年の2月15日、世界中で行われたイラク攻撃反対デモでは、ローマでも300万人が集まった。また、これらの事例はいずれも全国規模で行われたものであって、より小規模なものを含めれば、いまやイタリアの主な都市では、ほぼ毎日曜、どこかで集会やデモが行われていると言っても過言ではない<sup>7)</sup>。

もちろん以上は、社会運動の全容ではなく、デモ行進という対外的な示威行動の側面に焦点を絞っての紹介である。しかしこの行動は、社会運動にとって、自らの主張や要求を公表するための重要な戦術の一つとして位置づけられるため、その盛り上がりの背景には、やはり彼らの社会運動そのものの隆盛があると考えられる。

また、これらの動きが、実質的な成果を上げているか否かに関しても、まだ明確な答えは出ていないことも付け加えておく。それらは、大衆の一時的なヒステリー行動であり、一部の煽動家による暴力的な運動だという批判も、特に政治家たちの間では強くみられる。ここには、2001年のジェノヴァ・サミットで起きた反グローバル化運動と警官隊との衝突事件が、イタリア社会にとってはいまだ生々しい記憶として残っているからかもしれない。しかし、その一方で、こうした動きが今や無視できない力を持ち始めていることは、たとえば冒頭の台詞に端的に示されている。これは、上記のジロトンディのデモ行進に対する当時の上院議長ペラのコメントだが、ここに既成の政治家たちの苛立ちを見て取ることは容易である。いずれにせよ、既成の体制に対する不満、要求、賛否の意思等を、広場という空間に出て行って表明するという行動様式は、ここ数年の間に、少なくともイタリア社会では、急激に一つの政治的な行動として形をとりつつあるのである。

## 1.2 問題の所在

ところで、こうした動きは、確かに近年目に付くようになった現象だが、ここには、果たしてそれを、近年の社会システムの変動に伴って新たに生じたものであると言い切ってしまうとよいのかという問いが浮かび上がってくる。それは、少なくともデモ行進という、広場（および街路）で自己主張をするという行動それ自体は、彼らの日常生活の中にすでに埋め込まれていると考えることもできるのでないか、という問いである。

もちろん、近年の社会運動の隆盛には、グローバル化、高度情報化、ヨーロッパ統合、既成政党の機能不全、価値観の多様化など、イタリア社会を取り巻く様々な次元のシステム変動が大きく関与している。その意味では、以上のような動きとは、やはり優れて現代社会に特徴的な現象であり、実際、そうした視点からの考察は、すでに数多くの研究者によって行われてきている<sup>8)</sup>。また、ここで誤解のないよう付け加えておけば、社会運動やデモ行進等の示威行動そのものは、決して近年になって始まったものではなく、その歴史は、労働者運動をはじめとして、すでに長い。そして、それらと近年の運動の異同に関する研究もすでに進んでおり、後者に関しては「新しい社会運動」という用語が用いられている<sup>9)</sup>。しかしながら、そうした歴史的な研究においても、社会運動という問題が社会全体のシステムとの関連というマクロな視点から議論されていることに変わりはない。

こうした見方に対して、筆者がここで注目したいのは、その運動が、たとえマクロな社会システムと連動しているにしても、その際、何故、デモ行進等の示威行動という形をとって出現するのか、という問いである。そして、その疑問とともにもう一度彼らの日常生活を振り返ってみると、バラ上院議長がいみじくも指摘した「広場」とは、すでに重要な生活空間として彼らの生活のなかに位置づけられていることに気付く。広場が、イタリア社会では、社交の場などとして様々な機能を果たしてきたことは従来から良く知られている。とするならば、こうした広場での社会関係という下地があったからこそ、近年、社会運動の高まりの中で、デモ行進等の広場や街路での示威行動が急激に盛んになってきたのではないかと、また、近年の社会運動一般の隆盛それ自体も、実は、そうした広場的な社会関係のあり方と密接に関係しているのではないかと、という問いも出てくるのである。本稿は、こうした問題意識を下敷きにすることによって、社会運動やその示威行動そのものではなく、（今後その問題を本格的に議論するためにも）広場での社会関係のあり方について、あらためて考察していこう

とするものである。

さて、イタリア社会における広場の重要性という課題は、実はこれまでも多くの研究者によって考察の組上に載せられてきた。たとえば歴史学の中には、革命や蜂起などの政治的事件が広場での集会や祭りをきっかけとするものであったという報告も少なくない。ただしその多くは印象的・部分的なものにとどまり、広場そのものを本格的に考察の中心に据えたものとなると、大半は建築学者による都市計画的な関心にそった論考であった。一方、人類学は、たしかにこの問題に高い関心を示し、広場で展開されている社会関係についてもより詳細な考察を試みてきたが、後述するように、その議論は機能的な側面に焦点を当ててきただけで、質的な側面に関する考察は不十分だった。ここには、そもそもイタリア社会が、フォーマルな制度が機能しにくい「無秩序」な社会として否定的にイメージされてきたという事情が関係している。広場での行動や関係とは、往々にして、人々がそうした「無秩序」な社会で生き抜くための営為、つまり各自の利害を防衛・追求しようとする利己的な営為であると理解されてきたのである。しかし、そもそも広場とは、それだけの場所なのだろうか。

こうした見解に対して本稿では、広場を、とにかく人々が集まって社交を展開している場という側面に注目して考察していくことにする。上述のような広場での示威行動も、実は、この側面と密接なつながりをもっていると考えられるのである。

そしてこのとき、広場での社会関係とは、結論を先取りするならば、「〔他者〕同士の関係」として浮かび上がってくる。ここでいう「〔他者〕同士の関係」とは、後に詳しく説明するように、人々が基本的に相手を、いかなる範疇にも表象・還元できないまったくの「他者」として遇しながら関わり合う関係のことである。すなわち広場には、こうした「他者」たちの関係が展開されているのであり、この関係こそ、広場を、多種多様な人々が共存し主張しあう、いわば公共の場として作り上げていると推察される。

もちろん、このように互いが何者にも還元されない「他者」として向き合う関係とは、一見奇妙かつ論理矛盾のように聞こえるかもしれない。我々は通常、どんな関係を想定する場合でも、そこに何らかの相同性や関連性が存在することを前提としており、ゆえに他者とは、自らの相同の基準によって想定された他者、つまり他者として表象化・類型化された既知の存在になると考えられるからである。

しかし、本稿でいう「他者」とは、少なくとも原理的には、そうした他者という表象を超えるもの（より正確には、それとは無関係のもの）であり、互いにそうした「他者」同士であるがゆえに生ずる関係というものも、社会の中に想定することがで

きるのではないか——これが本稿の最大の問題関心である。そして、そうした関係のあり方を十分に認識できなかったことが、実は、これまでのイタリア研究が、イタリア社会をあまりにも否定的にしかイメージできなかったこととも深く関わっていると考えられるだろう。我々は、社会理論そのものも、この関係性の視点から再考する必要があるかもしれない。

さて議論が若干先走ってしまった。本稿は、以上のような可能性をもちつつも、イタリア社会における広場をはじめとする戸外での彼らの行動をまずは丹念に分析し、そこで彼らが営んでいる関係性の特徴を把握するとともに、それがイタリア社会にいかなる意味をもたらしているかについて考察していくことを主眼とする。ゆえに、その考察がイタリア社会という枠を越えて、より一般的な議論にいかなる貢献をしようかについては、今回は若干の示唆に止めておく。

なお、本論にはいる前に、あらかじめ2点ほど述べておきたい。まず以降の議論では、筆者は「広場」ではなく「戸外」という言葉を用いていく。というのも、後に詳しく見ていくように、彼らの日常生活においては、広場だけでなく路地も重要な社交の空間として位置づけられているからである。両者はたしかに男性の空間と女性の空間として性によって明確に区別されており、それゆえの差異がないわけではない。しかし路地は、男性にとっての広場と同様、女性にとっての戸外空間であるとみなすことは十分に可能である。「戸外」とは、この両者を含めて彼らの戸外での行動をより包括的に考察していこうとする意図を込めた言葉である。

そしてもう一つは、イタリアおよびイタリア人という言葉についてである。本稿でとりあげる民族誌的資料は、具体的には、筆者が1986年以来断続的に調査を続けているローマ近郊の一町（以降、R町と仮称）での事例にもとづいている。R町は、人口約8,400人（2000年現在）の比較的小規模な町である<sup>10</sup>。標高約760mという比較的高地に位置するため農耕に適さず、現在では自家用の作物やブドウ栽培を除けばほとんどの農家は消滅し、多くの家庭は雇用者として生計を維持している。

したがって、その考察をイタリア社会一般に敷衍して当てはめることは、たしかに乱暴かつ危険であるに違いない。イタリアは、その社会文化的特徴のみならず歴史的にも大きく南北に二分されて語られているが、実際はそれ以上に地域的な多様性に富んだ社会である。しかしながら、近年、たとえば「南イタリア」という地理的範疇そのものが、イタリア統一以降の近代化の過程で植民地主義的に形成され意味づけられてきたことが明らかになってきたように（Schneider ed. 1998）、こうした地理的な範疇化という営為それ自体の抱える問題は小さくない。本稿の考察の主眼は、あくまで

も彼らの戸外生活を新たな視点から分析しようとする試みである。このため、イタリアではたいていの町で広場や路地が見られるとはいえ、それをイタリア／イタリア人の文化的特徴として提示しようとする意図はない。また、同様に戸外での社会関係を重視している地中海ヨーロッパをはじめとする他のヨーロッパ地域はどうか、さらには、戸外ではないがコーヒーハウスやイン等の場が重視されている地域はどうかという問題も出てくるだろうが、これらの問題についても、本稿では同様の理由から問わないものとする。

ではまずは、イタリアの日常生活の中で、広場をはじめとする戸外の空間において、具体的には何が行われているのか、その概要を、先行研究における論点を整理しつつ確認することから出発していこう。

## 2 イタリアの戸外空間

### 2.1 広場

イタリアでは、人々は暇さえあれば、戸外で過ごしている。彼らは、食べて寝る時間以外は（もちろん仕事の時間も含むが）、戸外にいるといっても過言ではない。

特に男性は、仕事から戻ってくると、いったんは家に戻るが、すぐに広場に出かけて行って、そこで他の男性たちといわゆる社交を展開する。このため、夕方になると、しばしば広場は、集まってきた男性でごった返すことになるが、退職や失業などによって職を持たない男性にいたっては、昼間から広場の周囲を手持ちぶたさぎにうろついている。また、夕食の時間になると、そのまま友人たちと連れ立って近くの居酒屋に入って過ごす者も少なくない。そして気候の良い夏であれば、いったんは家や居酒屋に入った男性たちも、再び外に出てきて、夜半過ぎまで広場の周辺にたむろしながら談笑している。広場は、彼らにとって、毎日かなりの時間を費やす重要な社会空間なのである。

さて、こうした広場の光景は、イタリアのどんな町でも程度の差こそあれすぐに目に付くものであり、これまでも多くの研究者によって注目されてきた。たとえば建築学者・芦原義信は、「イタリアにおける広場というものは、単にそれと同じ広さの空地ではない。それは生活のしかたであり、生活に対する考え方である。イタリア人は、まったくのところ、ヨーロッパの国々の中で、最も狭い寝室を持っているかわりに最も広い居間を持っているとも言える。…ほとんどの余暇は屋外で送られるし、送

られなければならないのである」と述べている（芦原 1962: 21）。筆者の調査地 R 町でも同様であり、比較的小規模な R 町の広場は、夕方になると文字通り男性たちでいっぱいになることも少なくなかった。彼らは筆者に「おまえは、日本では夕方どこに出かけるのか」という質問をしばしば投げかけたが、この問いには、戸外での生活がいかに彼らの生活全般に根付いているかが如実に示されている。ちなみに「日本では、いったん帰宅したならば、帰宅途中はともかく、家を出ることはほとんどない」という筆者の答えに、彼らはなかなか実感として納得できなかったようである。広場とは、こうした彼らの戸外での生活そのものを空間的に表現したものであると言うこともできる。ゆえにここで簡単に、物理的空間という観点から、広場の位置づけと構成を見ておくことにしよう。

既に拙稿（宇田川 1987）でも述べたように、イタリアの町の多くは、丘上に作られた極端な集住集落の形態をとっている。そのプランの原型は中世にさかのぼることも少なくなく、かつてはその周囲に城壁がめぐらされていた。もちろん現在では、ほとんどの場合、町はその城壁跡を超えて広がっている。しかし、その広がり方がしばしば旧城壁に対して同心円状であることから分かります。町全体の単位としての密集性は基本的には崩れてはおらず、その内部は、互いに壁を接して高密度に建てこんでいる数階建てのアパートメント群と、その間を迷路のように入り組んで走っている狭い路地によって埋めつくされている。

一方、町の中心部には、たいてい広場 *piazza* が作られ、それに面して町の象徴でもある教会や旧領主館（現在では町庁舎として使用されていることが多い）が建てられている。広場は、周りを建物に囲まれているためか、町の外部からメインストリートを進んで広場に行き着くと、閉鎖的な雰囲気の中にもぼかりと空間が開いたような印象を受けるが、そこは、既述のように、主に男性たちが暇を見つけては集まってくる最も賑やかな場でもある。そしてバール *bar* というイタリア式の喫茶店<sup>11)</sup> や様々な店舗が集中し、その裏手あたりには、男性たちが利用する居酒屋（ただし葡萄酒のみを販売）も店を出している。中でもバールは、広場で長時間過ごす男性たちにとっては、気分転換をしたり、知り合いとの待ち合わせ場所にしたり、互いにコーヒーの奢りあいを行ったりと、社交のための重要な「小道具」となっている。このほかに床屋や他の店先が、男たちのたまり場となっている場合も少なくない。

以上の空間モデルは、基本的にはほとんどの町に当てはまり、R 町も例外ではない（図 1）が、もちろん、実際のイタリアの町や広場は多様である（ズッカー 1975；竹内 2001）。たとえば、多くの場合、広場は各町に一つとは限らず、R 町でも旧城壁内に

限っただけでも2つの広場(①と②)がある。ちなみに旧城壁の外側に位置する広場③は、正式には広場とは呼ばれていないが、戦後、住宅地の広がりとともに広場的に利用されるようになった空間である。現在では、かつては町外れの僧坊に過ぎなかった近くの教会(図1の⑥)とともに、この新興地区の象徴的中心にさえなっている。

また、こうした複数の広場の存在とは、しばしば機能の違いとしても説明されることがある。特に中世に作られた町の広場は、当時の人々の生活の主な関心事にあわせて宗教・政治・経済の3つの機能に分かれることが多く、現在でもその傾向は引き継がれているという(加藤1985:82)。すなわち、教会に面している広場は主に宗教的な祭事などが行われる場であるが、庁舎などの政治に関連する建物がある広場は、教会前の広場よりも日常的に人が集まり、時には政治集会などが行われ、相対的に政治的な話題が多く議論されている政治的広場である。さらに、定期的に食料品や日用雑貨のマーケットがひらかれる広場もイタリアの町では重要な空間である。この経済的な広場は、前二者が町の中心部に位置する傾向があるのに対して、外部からの商人たちが出入りしやすい町の周辺部に作られる傾向にある。

こうした機能的差異は、R町の広場にも見出すことができる。広場①は、この分類に従えば、いわゆる宗教的な広場である。また、R町の場合、町庁舎はこの①に面しているが、事実上の政治的広場は、2つの政党支部をかかえる②であり(図2)、選挙運動などの政治的な行動はここでもっとも盛んに行われる。そしてマーケットは、毎木曜日の午前中、③で開かれる。

しかしながら①も③も、宗教的な祭事やマーケットがなされないときには、②と同様に、単に人の集まる場所として利用されており、そのいずれにもバルや居酒屋という男性たちの戸外生活に不可欠な場が設けられている点も忘れてはならない。つまり広場とは、物理的にばかりと開いた空間として宗教行事などの様々な催し物に利用されるだけでなく、基本的に、人々、特に男性が戸外に出て集まってくる場所として整えられ活用されているのである。本稿が以降着目していくのも、この意味での広場である。

そしてその意味では、R町には、広場の他にも男性たちが集まる場所がいくつか存在することも付け加えておこう。それらは、たいていは広場以外の場所に作られたバルの周辺である。ゆえにそこは、町中の男たちが集まってくる場所とは言い難いが、その背後にはやはり居酒屋があり、男性たちの戸外空間としての体裁は整えられているし、その常連でない男たちも、後述のように散歩中にしばしば立ち寄っている。戸外空間を、狭義の広場にこだわらずに、人々が集まってきて時間を過ごす場所



図1 R町の中心街区：R町は、城壁跡に囲まれた歴史的な中心地区 *centro storico*、その周辺に広がる地区、そこからさらに離れて戦後に開発された新興住宅地区の3つに分かれる。この図は、そのうち歴史的な中心地区を中心としたもの。2000年現在。

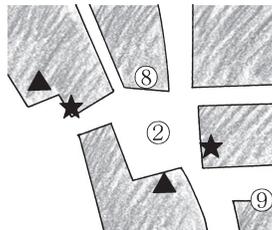


図2 広場②の周辺

として定義するならば、これらの地点も、男性たちにとっては重要な戸外空間の一部をなしている。

## 2.2 路地

ところで広場が、このように男性たちの空間であるとするならば、女性たちは、男性とは違って戸外での生活を持たないのだろうか。実際、彼女たちは特別な催事や買い物などの用事がなければ、広場に向くことはなるべく避けようとする。イタリアの町における男女の生活空間上の分離は、現在でもかなりの厳格さが保たれている<sup>12)</sup>。しかし、すでに述べたように女性たちも、男性たちと同様に、路地という空間で活発な戸外生活を展開している。

実際、路地での女性たちの付き合いは、これまでの民族誌でもしばしば近隣関係として頻繁に指摘されてきた。R町でも、特に午後になると、町の路地のあちらこちらで、女性たちが数人ずつ集まって談笑している姿を見かける。イタリアでは現在でも3時間ほどの昼休みを就業時間に組み入れている職場が多く、学校もしばしば午前中で終了するため、昼食は家族そろって自宅でとることが多い。したがって主婦たちは、午前中は、午後1時から2時ごろには戻ってくる家族のために、昼食の準備を中心とする家事に忙殺される。しかし昼食が済むと、多少暇な時間ができて、三々五々、路地に出てきては、近所の女性たちと話し込んだり、友人の家まで散歩に出かけたりして、夕食時までの時間を戸外で過ごすのである。

確かに女性たちは、夜遅くまで戸外にいる傾向のある男性に比べれば、家事のために頻繁に家の中に戻ったりするため、戸外で過ごす時間は相対的に少ない。実際、女性たちは「男は外にばかりいる」としばしば愚痴る。しかしながら、買い物帰りに出会った知人と立ち話をしたり、買い物にかこつけて散歩をしたりと、やはり彼女たちにとっても戸外は重要な生活の場である。また、路地空間には、広場のバルや居酒屋のような特別な施設はないが、路地のなかでも若干広がった部分にイスを持ち出したり、アパートメントの入り口の階段や外階段の部分を利用して腰をかけたりして、戸外空間を演出している。時には、各自のアパートメントに接しているという利点を生かして、誰かが家からコーヒーを作って持ってきて皆にふるまうこともある。

にもかかわらず、これまで路地空間は広場と同列に論じられることはなく、それぞれ私と公の空間として対立的に性格づけられる傾向が強かった (Delamont 1995: Ch. 6)。その論拠は、第一に、その空間的位置付けにあると考えられる。広場と路地は、町の中心と周辺とに位置し、前者が外部者の目にもつきやすい場であるのに対して、後者

は目に触れにくいばかりか、アパートメントという私的空間に隣接している。また広場は、その数が少ないがゆえに町の大方の男性が集まってくるのに対して、路地では、たいてい数人前後の女性たち（しかも近隣という範疇にはいろいろな女性たち）の集まりがあちこちに点在しており、この差も、同様の印象につながっているだろう。そして広場での男たちの話題は、選挙や祭りのことなど比較的政治的な事柄が多いが、女性たちのそれは、やはり家事のための情報交換が中心となる。イタリアでは、近年でも男性が主に家の外で政治経済的活動に携わる一方で、女性は家事を担当するという性別分業が強く見られるが、その分業傾向がそれぞれの話題にも反映しているのである。また女性たちは、路地でおしゃべりをしながら過ごしているときも、編み物や刺繍をしたり、豆剥きなどの料理の下ごしらえをしたりと、家事の延長線上のような行動をしている場合も少なくない。

しかし、ここで彼らの生活全般をもう一度見直してみるならば、広場と路地は確かに性別によって二分化されているとはいえ、それをそのまま公私の二分に当てはめることはあまりに早急であると言わざるを得ない。というのも、少なくとも彼らの生活全般の中では、広場／路地以上に重要な空間区分が、戸外と戸内との間に見出せるからである。

既に拙稿（宇田川 1996）でも述べたように、彼らの日常的な行動様式は、戸外と戸内とでは大きく変化する。戸内、つまり個々の家屋の内部とは、家族という範疇にはいる人々が就寝と食事を共にするという意味で、まさに家族の空間である。そこは、居住者の近親以外の者は気軽に足を踏み入れることはできず、物理的にも厚い壁と扉によって外部から遮断され、窓も小さく、他人が中に入ることを拒んでいるようにさえ見える。他方、戸外は、原則として誰もが行きかうことのできる場所である。そして彼らは、男女ともに、家から一歩外に出るときには身支度をきちんと整える。たとえばR町の主婦たちも、すぐ近くに買い物に行くときでさえ、エプロンやサンダル履きではなく、パンプスを履き、ハンドバックさえ持っていくことも稀ではなかったが、その一方で、家の中ではしばしば寝間着の上にガウンを羽織っただけの格好で家事をしている様子は印象的だった。

つまり、彼らの町空間には、戸内と戸外との間にまず基本的な断絶があるのであり、とするならば、広場と路地とは、ともに後者の戸外空間でありながらも、性によって二分化されたものと見なしたほうが適当であろう。実際、この視点から両空間を見直すならば、両者には後に述べるような共通の行動様式を数多く見出すことができるのである。にもかかわらず、従来こうした見方が欠落していたのは、研究者が女

性の行動に適切な考察の目を向けてこなかったか、女性に注目したとしても、せいぜい男女の区別を公私の区別と不可分なものとみなしてきたためであると考えられる。この研究者側の姿勢は、研究者自身が抱える近代的な男性中心主義的性差観に由来することは言うまでもない (Ferrante, Palazzi and Pomata eds. 1988)。また、それゆえ本稿では以降、広場と路地での男女の行動を、多少の差異はあれ、戸外での行動として一括して論じていくことにする。

### 2.3 戸外生活の諸相

さて以上から、戸外に出かけて戸外で過ごすという行動が、彼らの生活の中で空間的にも時間的にも大きな比重を占めていることは明らかになってきたと思われる。では、改めて、その行動の意味とは何なのだろうか。

もちろん、これまでも多くの研究者が、この行動（特に広場での男性の行動）に注目してきたが、その議論は、この戸外での行動がいかに重要な「機能」をもっているのかという点に集中していたと言える。たしかに彼らの戸外での行動をよく見てみると、そこでは様々な情報交換や取引・駆引が行われており、個人々が様々な目的や利益のために戸外での付き合いを利用している様子が浮かび上がってくる。

たとえばR町でも、選挙や祭りが近くなると、広場を中心とする人の動きが活発化し、様々な組織化や企画を呼びかけたり画策したりする人々の姿があちこちで見られた。筆者は、ある信徒会<sup>13)</sup>の会長E(仮名)について、彼が祭りの協力者や参加者を集める際に広場でのつきあいを積極的に利用している様子を考察したことがある(宇田川 1994)。ほかにも戸外では、巡礼や旅行の計画などの一過性の組織も頻繁に組織されている。また、戸外での付き合いは、これらのように直接的で明確な目的をもつものばかりではない。日常的に戸外に出ることが、より多くの人と接触しながら自分を売り込むことにつながるため、たとえば将来選挙に立候補するなど、政治的な野心を持っている者ほど日頃から戸外に出かけることが多い。その意味では、戸外でのたわいのないお喋りやコーヒーの奢りあいなどの社交的行為そのものが、長期的には重要な機能をもっていると言える。さらに、失業率の高いイタリアでは、子供のために職を見つけようとする親は、戸外での情報網を積極的に利用しようとするし、家屋の修理から日用品の貸し借りまで、様々な日常的な相互扶助にとっても戸外での付き合いは不可欠である。しかも、こうした行動は男性だけのものではない。既述のようにイタリアでは男女の性別分業がまだまだ強く見られるものの、実は女性たちも、高齢者や働く女性のために家事を手伝ったりして若干の収入を得ている者が少なくない

が、彼女たちはそうした情報を路地でつかんでいる。その具体的な事例としては、R町の40歳代の女性を取り上げた拙稿（宇田川1996）や、靴制作に携わるナポリの女性たちのネットワークに着目したGoddard（1996）を参照してもらいたい。

ところで、以上の議論には、前章でも若干述べたように、イタリア社会の特徴に関する或る議論が関与している。それは、イタリアがあまりにも個人主義的なエトスに支配されており、フォーマルかつ安定的な制度や組織が機能しない「無秩序」な社会であるというものである。

「無秩序」なイタリアというイメージは、世界的に有名な政情不安、マフィア、汚職・コネの横行などのせい、一般的にも広く流布している。研究者の中にも、制度や集団よりも個人の利益を追求しようとするイタリア人たちを *amoral* (Banfield 1958), *atomistic* (Galt 1973) 等の言葉で形容してきた者は多い。しかも、この見解は外部のものだけでなく、イタリア人自身のものでもある。たとえばイタリア人の人類学者 Tullio-Altan は、イタリアの国政が抱える諸問題を考察した著作『我々のイタリア』（1986）の中で、イタリア社会のあらゆる分野に深く根付いている恩顧主義や、便宜的で流動的な多数派工作、頻繁に繰り返される分裂や反体制運動などに注目しているが、そのいずれもが、上記のようなイメージを裏付けるものとなっている。

ところで、こうした「無秩序」イメージは、あくまでも社会を中心とする観点から生まれた評価であることは明らかである。しかし、それを個人の視点にそって見直すならば、「無秩序」とは、彼らがフォーマルな制度や組織よりも個々人がおかれている具体的な状況に合わせて作り上げたインフォーマルな関係を優先している結果であるという見方もできるだろう。たとえば Galt (1974) は、その二重性を *official system* と *real system* という言葉で指摘している。とするならば、イタリア社会の理解には、むしろこの後者の *real system* の側面を積極的に分析・評価し、そこに彼らなりの「秩序」を見出していくことが必要とされるだろうし、実際、これまでに、その視点からの考察は数多くなされてきた。

その一つが、以上のような個人的かつ戦略的な関係性や取引の実態を、ネットワーク分析などの手法を用いて微細に考察した研究群である。ことに恩顧関係、友人関係、ブローカーなどの言葉は、イタリア研究においては、初期の Silverman (1965), Boissevain (1966), Davis (1973), White (1980) 等から、近年の Moss (1995) や Zinn (2001) の研究に至るまで、不可欠の用語とされている。なかでも Prado (1996) は、様々な人間関係を自分の利害にしたがって戦略的に操作して貧困を生き抜いているナポリの人々の気質を *entrepreneurship* という表現を用いて積極的に描き出してい

る。また、そうした彼らの社会関係のあり方の背後にある価値観を、フルボ *furbo* / フェッソ *fesso* (ずる賢い / お人好し)、ファヴォーレ *favore* (恩恵)、オノーレ *onore* / ヴェルゴーニャ *vergogna* (名誉 / 恥) 等の民俗概念とともに明らかにしようとする研究も積み重ねられてきた。特にフルボという言葉には、Schneider, P. (1969) や Colclough (1971) など、多くの研究者が注目している。これは、いかなる関係においても、その関係を(時には相手をだましてまで)自分に有利に操作することを最終的には評価する言葉である<sup>14)</sup>。彼らは、あからさまな騙りや嘘は否定するが、相手にだまされてフェッソになるよりは、相手をだましてフルボになるべきだと言う。イタリアは、この言葉に代表されるように、個人的な取引や対人関係の操作に積極的な価値をおく社会であると考えられてきたのである。

さて、こうした議論のなか、戸外はこれらの個人的な関係がまさに具体的に展開される場として注目され、いきおい、上述のような機能主義的な視点からの戸外論が盛んになっていったと言える。実際、彼ら自身、戸外での付き合いをしばしばアミチツィア *amicizia* (友人関係) という言葉で表現している。この言葉は、もちろん情緒的な関係としての友人関係も指すが、そればかりでなく、たんなる知り合い程度の関係から、実質上は恩顧関係とも言える利害で結ばれた関係まで含んでおり、むしろ、後者のような操作的な取引関係を意味することが多い。戸外とは、いずれは役に立つ友人たちとの付き合いの場であるとも言いかえられる。筆者はR町で毎日のように広場に出かける男性たちに、「なぜ毎日、広場に出かけるのか」と尋ねたことがあるが、たいていは肩をすくめて返答しなかったり、家の中にいてもつまらないからと答えたりする中で、「時には家で休んでいたいと思うが、外に出ないと町のことが分からなくなってしまう」という返答も複数あった。すなわち、戸外が各自の利害に直結する場であり、イタリア社会の中で極めて重要な機能を果たしていることは、彼ら自身も十分に認識しているのである。

しかしながら、この種の議論は、あくまでも「無秩序」なイタリア社会というイメージとの関連の中で(そのイメージを覆そうとするものであれ補填するものであれ) なされてきたことを忘れてはならない。実際、このイメージ自体が、イタリアを「遅れた過去の国」と見なす欧米の研究者のオリエンタリズムの所産であることに気付くならば、彼らの社会関係には個人的かつ戦略的性格が強いという指摘は、実態以上に誇張されている危険性も否定できない。つまり以上の議論は、イタリア社会を *amoral* と形容した Banfield の著作の題 *The Moral Basis of a Backward Society* に典型的に見られるように、イタリア社会は後進的であるがゆえに *official system* が機能せず個

人的な関係を優先しているというイメージの連鎖に強い影響を受けていると考えられるのである。そして、もう一つ考慮すべき点は、それゆえこの議論は、彼らの戸外生活の一部分にしか着目していないのではないか、という疑問である。

実際、戸外での関係が彼ら（および彼らの社会）にとって様々な利益をもたらしているという見解は、あらかじめそこに何らかの機能を見出そうとする問題意識があつてこそその結論である。そこでは、戸外での行動すべてが「機能」という観点にあまりに容易に収斂されてしまっているとも言える。しかし彼らは、そもそも具体的な目的のためだけに外出しているわけではなく、また、そこで出会う人すべてが友人 (*amico/a*) として認識されているわけでもないだろう。実際、広場に関しては、これまでもしばしば「公共の場」などの表現によって、原則として誰にでも開かれ、多くの人が集まる空間であると指摘されてきた。イタリア語で *mettere in piazza* (広場におく) という表現は、「公表する・広める」という意味だし、*piazza* (広場) という語そのものが、単なる空間ではなく、「そこに集まる人々・群衆」をも意味する。とするならば広場のみならず路地も含めた戸外空間とは、何よりもまず、より多くの人と出会える場として意味を持っていると考えることもできるのではないだろうか。もちろん、そこで知り合った者のうち何人かが、その後、友人として範疇化されたり、その間で様々な取引が行われたりすることはある。しかし、戸外には、そのいわば前段階として、基本的に誰でもが出入りできて誰とでも会えるという、いわば公共的な地平があると推察されるのである。

さて、だいぶ前置きが長くなってしまったが、戸外生活のこの側面こそが本稿の考察対象である。たしかに戸外生活に対するこうした視点からの考察は、従来皆無だったわけではない。特にイタリア研究の枠を超えてみるならば、社会史などの分野で「社交」という言葉（特にフランス語のソシアビリテ *sociabilité*）で注目されてきたものにも通ずる。実際、イタリアの広場での行動も、しばしばこの言葉で表現されてきたし、その意味では、ソシアビリテ研究の第一人者 Agulhon が、酒場や夜の集いなどを事例として指摘した「かたちのないソシアビリテ *sociabilité informelle*」という考え方は興味深い<sup>15)</sup>。

ただし、それら先行研究のほとんどは、そうした社交の具体的描写に終始するか、そこでの関係を、親族、地縁、職能、年齢などの他の諸関係や組織に結びつけて論ずるかのいずれかにとどまり、そもそも社交や公共の場で展開されている関係とはどんなものなのか、つまり、そこには他の親族などの関係性や組織に還元されない何かが見出せるのか否かについては、本格的な議論は行われてこなかった。その理由の一つ

は、たとえば社交というものが、その形式性ゆえにある種の偽善や表層的關係と見なされやすく、十全な社会關係として論議されにくかったからかもしれない。また、公共性に関しても、特に近年は重要な社会問題の一つとして認識されてきてはいるが、その必要性や問題点という視点からの議論はあっても、多くの場合、公共性という問題をア priori に設定しているためか、そもそも誰もが誰とでも関わりうるという關係性とは何なのかという問いは、いまだ真剣に論じられていない。しかし、たとえば社交を、公共の場におけるある種の作法と見るならば、そうした作法の存在自体が、誰でも出入りできて出会えるという意味での公共の場の重要性を物語っていると言えるだろうし、とするならば、そうした作法とは何なのかを論ずる必要も出てくるだろう。そして、これまで見てきたイタリアの戸外生活の諸機能に関しても、こうした視点を加えることによって、さらに理解を深めていくことができるかもしれない。イタリアにおいて個人的かつ操作的な關係性が積極的に評価されているのは、イタリア社会の「無秩序」さのみに帰せられるのではなく、このいわば公共的な側面にも関わりがあるのではないかと、という問いにもつながっていくからである。

では、本格的に以上の問題を議論していくことにするが、そのためにも、まずは筆者がR町で遭遇した或る事件を紹介したい。実はこの事件が、筆者にこの問題を真剣に考えさせるきっかけとなったものである。

### 3 戸外のもう一つの側面

#### 3.1 Aの抗議

筆者がR町での最初の調査を始めて約10年後の1995年のこと。その年もR町を訪れた筆者は、あるスキャンダルに出くわした。筆者が町に到着する1週間ほど前、町の30代後半の主婦（以降、Aと仮称）が、近隣の町の売春組織に関わっていたとして、警察による事情聴取を受けたというのである。

実は、Aの売春<sup>16)</sup>の噂は、これが最初ではなかった。筆者も最初の調査時から次のような話を様々な人から聞かされていた。いわく――若い頃から美人で評判だった彼女は、17歳のとき、15歳以上も年上で見栄えも良くない男性と結婚したが、その理由は金銭目当てだった。というのも、彼は、当時としては羽振りの良かった公務員だったからである。ところが、次第に世の中が変わってくると、彼女の思惑に反して夫の収入や地位は相対的に下がってきた。それゆえ彼女は、年の離れた夫に（性的

な意味でも)満足できなくなって、贅沢したさに売春をするようになった。そうでなければ、いまどき町役場の職員の給料であれほど高価な毛皮のコートを買えるわけではないし、しばしば彼女が、特別な用事もないのに、昼過ぎからひとりで車で出かけていって夕方帰ってくるのはおかしい——等々の噂であった。したがって、上記のような事件が伝えられたとき、もちろん「恥知らず」という強い非難もあったが、その一方で、やはりという声も少なくなかった。

ところで筆者がここで問題にしようとしているのは、この事件そのものではない。確かにこの事件は、特に彼らの性規範の考察にとっては非常に興味深い事例である。よく知られているようにイタリアでは、カトリックの教義のみならず「名誉」や「恥」という民俗観念によっても婚姻外の性的交渉が厳しく規制され、それを犯した場合には制裁がなされることになっている<sup>17)</sup>。そうした社会において、売春の嫌疑をかけられることは、それが事実であるか否かに関わらずスキャンダルとなる。ところが、にもかかわらず、この規範を侵犯する事件は数多く起こり、また、表面化せずに黙認されている婚姻外の関係も少なくないことは、この事例だけでなく他の民族誌的な報告にも頻繁に見られる(Lindisfarne 1994)。しかも、たとえ発覚したとしても、一方的に非難されるばかりでなく、ある種の寛容さが見られることもある。とするならば、この事例の考察からは、そうした彼らの性規範とその実態との差が何を意味し、規範とは果たして何なのか、等々の問いに対する答えの一端が浮かび上がってくるだろう。

しかし、この事件に遭遇した筆者にとって、この問題以上に関心を引いたのは、以上のような噂が蔓延する中でA自身がとった行動である。つまり彼女は、強い非難の中で家に閉じこもっていたわけでも、そ知らぬふりをしていただけでもなく、いわば果敢に反論を唱えていたのであり、しかも、その反論の舞台は戸外だったのである。では続けて、筆者自身が偶然居合わせるようになった、彼女の抗議の一場面の描写を続けてみよう。

筆者がR町に到着して3日目、日曜日に当たっていたその日の午前中、筆者は町のメインストリート(図1の広場①と②を結ぶ道)沿いの煙草屋で、その主人(女性)と近隣に住む主婦の三人で噂話に花を咲かせていた。ほぼ2年ぶりに町を訪れた筆者に、彼女たちがその間に起きた出来事をコメント付きで教えてくれていたわけだが、しばらくするとAが煙草を買いに入ってきた。ちょうど日曜のミサが終わった時刻で、彼女も夫ともに教区教会(⑤)のミサに出席した帰り道だった。筆者はこの時、この夫婦とはまだ再会の挨拶をしていなかったもので、中に入ってきたAに挨拶

するとともに、入り口で待っている夫に歩み寄った。とその時、背後で、急にAの興奮した声が聞こえてきた。「調子はどう？」という主人の言葉に、彼女が「いいわけないでしょ」と、潔白と現在の苦境を語り始めたのである。

彼女の主張は主に、自分は事情聴取を受けた覚えはなく事実無根であるということ、そして自分たち夫婦にはみなが言うような問題はなく、子供も含めて家庭円満に暮らしているということの2点であった。実際、隣町で売春組織が摘発されたことは事実だが、その際にAが聴取を受けたか否かについては、正確には伝聞でしかない。また、噂の最も有力な根拠として、この地方で発行されている某新聞に、彼女と目される人物のイニシャルが掲載されたことがしばしば言及されていたが、彼女は、この記事については、でっち上げだと主張するとともに、二人の人物（うち一名は問題の隣町に居住）の名を挙げて、あたかも彼らが陰謀の首謀者であるかのような仄めかしも行った。ちなみにこの二名は、Aの家族とかつて確執があったことが知られており、彼女はそのことを我々に思い出させたわけである。そして、人々の噂好きや悪意によって自分たちの家族がいかに苦しめられているかを、時に身振りを交えながら強く訴え、話し相手の煙草屋や主婦から同情的な返答を引き出した後、ようやく一方的な会話を切り上げた。その間、10分足らずだったろう。ただし、彼女は立ち去ろうとしたところでまた振り返り、自分の潔白に関して念を押すという行動を二度繰り返し、最後には筆者にも（たぶん筆者も噂を聞き及んでいると見なしたのだろう）「誰の話も信じちゃいけないよ」と言い置いて出ていったのである。

### 3.2 抗議行動の形式性

さて、このAの抗議行動は筆者に強い印象を残したわけだが、中でも筆者の注意を引いたのは、その執拗さであった。Aは、その数日前から町中を歩き回り、出会った人ごとに同様の議論をぶつけていたという。彼女の家は、旧城壁の外の町の中心から離れた地区にあるため、以前はその近辺に姿を現わすことはほとんどなかった。ところが、事件後は、メインストリート付近の店までわざわざ買い物にやってくる姿を、筆者も何度か見かけた。その際、夫や子供たちと一緒に歩いている場合もあったが、町の人に言わせれば、これは極めてまれなことであり、こうした行動をとること自体、Aが自分の非を認めているようなのだと噂した。事実、この彼女の抗議行動はほとんど効果を上げることはなく、事件の真偽のみならず彼女の評判についてもあらためて考え直そうという意見は聞かれなかった。しかし、彼女の行動はしばらくの間執拗に繰り返され、表面的には噂が収まった後も、メインストリート付近に顔を出

すなどの行動を続けていた。

もちろん、この執拗さとは、この事件が性という、彼らにとって極めて重大な規範にかかわっているがゆえの行動として説明することもできる。既述のように、この規範に対する違反は、その重要性ゆえに、疑惑がもたれただけで、なかなか覆すことができない事実として流布されがちである。したがってAは、自らの名誉を守るために執拗に抗議をせざるを得なかったというわけである。その意味では、彼女の行動は、名誉を重視する彼らの規範にのっとったものと見なすこともできる。また、その成果は既述のようにほぼなかったが、もし抗議をしていなかったら、いっそう激しい非難にさらされていたという可能性もあるだろう。

ただし筆者の驚きとは、こうした彼女の執拗さそのものというよりも、実は、その執拗さが町の人々に許容されていたという点にあった。町の人々は、Aと直接に対面している限りにおいては、その場限りのおざなりであっても、彼女の話に調子を合わせて聞き、時には相槌を打ったり、同意したりすることも少なくなかった。先の煙草屋の主人と主婦も、Aが去った後はあきれたと言わんばかりの口調で非難めいた論評を行ったが、彼女の面前では積極的に同情を表明していた。とするならば、Aの抗議行動は、確かに実質的な影響をもたらさなかったとはいえ、そこでは、彼女の行動は形式的には受入れられており、そのとき、彼女と町の人々の間にはある種の関係が成立していたとみなすこともできるに違いない。では、その関係とは何なのか。そしてさらに言うならば、すでに筆者は、彼らの戸外における行動には特別な目的や必要性がなくともそこに集まって多くの人と出会うという地平がみられることを指摘してきたが、このAと町の人々の関係とは、まさにその地平につらなる問題であると考えられることもできるのではないだろうか。

ここで、興味深い議論のひとつとして紹介したいのは、近年「オークショット・ルネッサンス」<sup>18)</sup>とも言われるほど再評価が高まってきている政治学者オークショットの議論である。彼は、社会を作り上げている人々の諸関係のあり方を考える際、その結合様式の理念型として、目的を共有することによって結合するあり方を「ユニベルシタス *universitas*」または「企業的結社 *enterprise association*」という言葉で表現する一方で、「ソキエタス *societas*」または「市民的結社 *civil association*」という別の結合のあり方も見出せることも指摘した。このソキエタスとは、彼によれば、人々が特定の目的を共有する結合体ではなく、もっぱら形式的なルールに服することによって成立する結合体である。つまり、そこでは「何をするか」ではなく、「いかにするか」という形式的条件の遵守が重視され、ゆえに、その形式にさえ沿っていれば、それぞ

れが多様な目的を追求することも可能となるという社会のあり方である。もちろん彼のこの議論は、ユニベルシタス的な傾向の強い現代社会を批判し、新たな社会のあり方を模索しようとする政治思想の理念の一つとして提起されたものである。しかしながら、本稿の問題関心にひきつけるならば、ソキエタスとは、人間の行為や結合のあり方を、目的や結果ではなく、形式という側面から理解しようとする可能性として見ることもできる。とするならばこの考え方は、これまで指摘してきたように機能だけに安易に還元できないイタリア社会の戸外行動の考察にも有用な示唆を与えてくれるだろう。

そして実際、この視点から、Aが町の人々と戸外で対していた場面をもう一度振り返ってみると、そこでの彼らの振舞いには、非常に高い形式性が存在することが浮かび上がってくる。それはまず、際立った対面性である。たとえばAは、煙草屋での筆者との遭遇の後も、出会う人ごとに直接的に主張をぶつけており、その際、相手が複数であっても、身体の向きをしばしば変えることによって、その一人一人に訴えるという対面的な形式をとっていた。この身体性の問題に関しては後にも詳述するが、こうした直接的な身体のあり方自体が、彼らの戸外での関係が、1対多ではなく、1対1の対面的な関係として形式付けられていることのもっとも端的な表れの一つであることは明らかだろう。

また、この対面性とは、人称性という言葉でも言い換えられる。実際、対面的な会話とは、当然のことながら一人称と二人称で成立しており、Aの抗議の場での会話も、徹底した人称関係によって貫かれていた。しかも、その人称性は、しばしば「ジェンテ *la gente* (人々、世間) が、ああ言っていた、こう言っていた」という具合に、会話(すなわち一人称と二人称)の場にジェンテという三人称(すなわち非人称)の存在が挿入されることによってさらに強化されていた。

そして、ジェンテの世界が、各個人についての様々な評判が語られ蓄積されている場であるとしたら、「わたし—あなた」という人称的な場とは、そうした予断なしに両者が出会える場、または出会うべき場として設定されていると考えることもできるだろう。このことは、この事例の場合、Aに対するあだ名である「チポッラのA」と、固有名「A」との使い分けにもっとも端的に表われている。

R町の人々はAに関して様々な噂を語る時、たいていは「チポッラのA」(チポッラとは玉葱を意味するが、彼女の母方祖父の頭の形に由来する)というあだ名<sup>19)</sup>で言及する。ところが対面的な場では、このあだ名が口にされることはなく、Aに対しては二人称または「A」という固有名で呼びかけがなされている。たしかにこれ

は、あだ名を本人の前で使用することが礼儀に反するとされているがゆえの対処かもしれない。しかしながら、固有名の問題をより一般的に考えてみると、たとえば我々は「アインシュタイン」という固有名によって指示される人物について、実は最終的には記述しつくすことができないように、そもそも固有名とは、その指示対象がいかなる叙述によっても把握不可能な側面をもっていることを示唆する記号であるとも言われている<sup>20)</sup>。とするならば、この事例でも「A」と呼ばれるときの彼女とは、いわば三人称として表象化された「チポツラのA」に（最終的には）還元できない人物とみなされていると推測することもできるだろう。もちろん実際には、対面的な呼びかけの場であったとしても、彼らがAに対して何の与件もなく接しているとは言いがたい。しかし戸外の対面的な場では、Aは、少なくとも形式としては人々の評価の蓄積である「チポツラのA」ではなく、「A」として設定されていると考えられるのである。

さてこうしてみると、Aの抗議行動とは、きわめて対面的・人称的な形式をもつ関係性の上に成立していることが浮かび上がってくる。もちろん、これはあくまでも個別事例の分析であって、それを安易に彼らの戸外行動へと一般化することはできない。しかし、既述のようにAのこうした行動が町社会の中で十分に許容されていた点にもう一度注目するならば、彼らの戸外生活には、やはり、こうした対面的・人称的な関係に沿って営まれ、その関係の形式性の遵守こそを一義とする地平が存在していると言えないだろうか。つまり、Aの執拗な抗議とは、こうした形式に則っているからこそ容認されていたのであり、また、Aの主観的立場からすれば、この形式を利用することによって自らの噂を覆そうとしていたと推察されるのである。筆者はR町で、この事例以外にも不快な噂に対して抗議する場面をいくつか目撃したことがある。そのいずれも、Aと同じように実質的にはほとんど成果が上がらないまま人々と戸外で対話を続けており、その様子は、外部者である筆者にとっては奇妙な感じさえした。しかし、何度も繰り返すように、彼らにとっては、このように会話が成立している場こそが重要であると考えられるのであり、とするならば我々は、この地平に積極的に着目した考察を試みていく必要があるに違いない。

では、以上の予備的な考察を念頭に置きつつ、本論に戻って、彼らの戸外での行動一般を、特にその形式性という視点から見なおしてみることにしよう。

## 4 戸外に現われる「あなた」と「わたし」

### 4.1 挨拶とジーロ

すでに筆者は、戸外とは、人々が、その目的が何であれ、とにかく集まってきて互いに出会う場所であり、この側面こそが考察すべき課題であると述べてきた。ところが、戸外で人が集まり出会っている様子に関しては、実はこれまで、その詳細な記述さえ十分に行われてこなかったと言わざるをえない。その理由は、既述のように従来の研究があまりにも機能主義的な観点を重視してきたためである。したがってここでは、彼らの戸外での行動を、その目的や機能という視点とは関わりのない、いわば具体的な振舞いの次元にそって考察していくことにする。そもそも彼らは、戸外で何をしているのだろうか。

たとえば、彼らの行動をよく見てみると、まず気づくのは、彼らが常に戸外で誰かと一緒にいたり、会話していたりするわけではないということである。彼らは、たいいてい、出会った者と挨拶を交わす程度で通り過ぎてしまうばかりか、そのとき言葉を口に出さずに目配せだけですませてしまうことも多い。誰かと隣り合っているときでさえ、いったん挨拶を交わしてしまえば、互いに話をせず黙ったまま通り過ぎる人々を眺めている。また彼らは、戸外では決して一カ所にとどまってはならず、しばらくすると他の場所に移ったり、あちこちを散歩していたりする。

こうした実態は、一見、人々が集まる場としての戸外のイメージに合わないかもしれない。しかし、この行動にさらに注目するならば、そこには、皆と出会う場としての戸外という考え方が、むしろ凝縮されていることが浮かび上がってくる。

ここで、R町で最も戸外行動の活発な人物の一人、Eという男性を例にとってみよう。彼は、すでに2.3でも若干触れたように、R町最大の信徒会である聖アントニオ信徒会の会長を務める人物である。それゆえ彼の戸外行動には、第一に、祭りの企画・運営のために多くの資金と協力者を集めるという目的がある(宇田川1994)。ただし彼の外出好きには、パン屋という彼の職業も関与しているかもしれない。パン屋は早朝から仕事を始める一方で、午前中の早い時間に仕事を終えた後は、比較的自由に過ごすことができるからである。また彼が、人と話したりふざけたりするのが好きな「お調子者 *mattachione*」であるという性格的な要因も小さくない。そもそも彼が信徒会会長になったこと自体、最初からそうした目的をもっていたというよりも、以上のような時間的な自由度や性格などの要因によって、常日頃から人一倍戸外で過ご

す時間が長く、その技術に秀でていたために、幅広い人脈が生まれる過程で思いついたものだとも言える。いずれにせよ町の人々は、彼をしばしば「広場の男 *uomo di piazza*」と呼んでいた。

ところで、彼が外に出てまず行くこと、それは挨拶である。Eが外出して、まず真っ先に行くのは、自宅のすぐ近くにある広場②(図1)である。広場に入ってくると、そこにすでに陣取っていた男性たちに簡単な挨拶をかけながら、バールへと入っていく。バールでは、エスプレッソコーヒーを注文し、カウンターで飲み終わるまで、せいぜい数分といったところだろうが、その間、他の客やマスターとも簡単な世間話を交わす。その会話はさわめて短いものだが、友人を見かけたか、自分は今日何をしたか、これからの予定は何かなど、人の動きに関するものである点は興味深い。そしてその後、Eはまたすぐ表に出ていく。

バールから広場に出たEは、話したい相手がいなければ、そのバールの出入り口等の広場の一角にたたずんだまま、しばらくはひとりで過ごす。しかしその際も、彼は決して何もしていないわけではない。R町の広場は、他の町の広場と同様に、メインストリートに直結し、周囲に食品や雑貨の店もあるため、様々な用事や目的をもつ人々が行き交う場所である。Eは、そこを通り過ぎる人々の姿に注意深い視線を送っている。車で通りすぎる場合も、その車の所有者を熟知しているので、同乗者はいるか、仕事に向かうのか否か等々、観察すべき事柄には事欠かない。そして相手側も同様の関心を持っているため、たいていは互いに相手を認識しあって、挨拶が交わされる。それは多くの場合、目配せをしたり、あごをしゃくったり、片手をあげたりするか、せいぜい相手の名前を呼び合う程度のものであるが、時には、相手から「会長! (信徒会会長のこと)」とおどけた調子で呼びかけられると、Eも陽気な声音で相手の名前を呼び返す。また、日頃お互いに冗談を言いあっているような間柄の相手が通りかかれば、素早く両手を広げて抱擁したりすることも多く、こうした振舞が彼の「お調子者」という評判の一因になっている。もちろん、Eが探していた人物が通りかかれば、バールに連れ立って入ったり、相手が車に乗っていれば、その車にさっと近づいてウィンドー越しに話しかけ、その車に同乗して去ってしまうこともある。ただし、このように誰かと話している最中でさえも、そこに別の誰かが通りかかれば、目配せ等の簡単な挨拶をすばやく行う。つまり彼は、広場にいる限り常に周囲に気を配り、次から次へと通りかかる人との間に、たとえ数秒であっても、挨拶という形で対する関係を作り上げているのである。

さて、こうした頻繁な挨拶行動とは、決してEだけに見られるものではない。町

の人々は、戸外では常に誰かに挨拶をし、また、より多くの人に挨拶しようとしていると言っても過言ではない。そして挨拶が、(当然のことだが)人々が互いに直接的に出会う場で成立する行動様式であることに注目するならば、この行動は、戸外でのもう一つの行動様式、ジーロ *giro* と密接にかかわってくる。

ジーロとは、一義的には「回転」を意味する言葉だが、そこから派生して「旅行・散歩」の意味をもつ語でもある。しかし彼らの日常生活では、たとえば「Eはいるか?」「いや、ジーロに行ったよ(=外出したよ *E andato in giro.*)」「あいつはいつもジーロ中だ(=外出中だ *Sempre sta in giro.*)。なんてジローネ(=ジーロ好き、外出好き *girone*) なやつだ!」という具合に、たんに「外出する・外にいる」程度の意味で用いられることが多い。ここには、彼らにとっての外出が、動き回るという行動でもあることが暗示されている。実際、先にも述べたように、彼らはそれぞれ広場や路地に顔を出した後、そこにそのままずっととどまっているわけではない。たいていは、しばらくすると姿を消し、その後いつの間にか元の場所に戻ってくるという行動を繰り返している。

筆者は、1987年初夏のある晴れた日、Eの行動を広場②で定点観測したことがある。彼が、その午後、広場②に来たのは昼食を終えた午後3時半頃で、最終的に広場を辞して帰宅した8時過ぎまでの間、広場を離れたのは5回だった。それぞれの時間は20分から2時間余りまでであり、行き先は広場①③、友人のぶどう園のほか、特別な行先を持たないまま友人と散歩をしていたという。広場②はEのいわゆる持ち場の広場なのだが(Eに会いたい者はまずここを訪れる)、彼がそこにいたのは、結局、合計1時間半ほどだった。

もちろん、こうしたジーロ行動とは、人によっても、さらには天候などによっても異なるため、この資料をR町の標準としても、E自身の平均としても見ることはできない。しかし男性たちは、まずは行きつけの広場のパールでしばらくの間はたたずんでいても、そこに通りかかった知り合いと、あるいは、一人でぶらぶらと立ち去っては、また戻ってくる。行き先は、Eと同様に、別の広場やパール、友人の家、あるいは、住宅街の外に広がる農地などだが、多くの場合、行き先を定めずに散歩をしながら、その場の気分や出会った人物の都合などで動いている。そして夜になって居酒屋に入った後も、いくつかの居酒屋をはしごすることも少なくない(ただしEは、朝4時にはパン焼きの仕事にかかるため、祭りの準備期間以外はあまり居酒屋には出入りしない)。また、女性も同様である。女性たちの活動範囲は、その舞台が路地であるため、これまで男性に比べると狭いと思われがちだったが、彼女たちも、路地から路

地へと散歩をしながら、近隣を離れてかなりの空間を移動している。R町では、そうした女性たちの散歩先の一つに墓地（図1）があった。彼女たちは、墓地ではもちろん家族や親戚の墓を掃除したり花を飾ったりしたりしているが、同時に、かなりの時間を、墓地あるいは途中で出会った女性たちとの噂話に費やしていた。墓参とは、むしろ、そのための口実であるようにも見えた。

さてこうしてみると、彼らの戸外生活とは、単なる外出ではなく動き回ることであり、と言いきる必要も出てくるかもしれないが、より重要なのは、この行動が、一人でも多くの人に直接に出会おうとする行動であるという点である。たしかに戸外とは人々が集まってくる場ではあるが、路地のみならず広場も町の中には複数箇所あり、一カ所にとどまっているだけでは会える人物は限られてしまう。しかし、ジーロをすれば、様々な人に会える可能性が高まる。実際、彼らは道をぶらぶら歩いている最中も、他のジーロ中の人や、窓から外を眺めている人と頻りに挨拶を交わしていた。とするならば、ジーロとは、挨拶行動と同様、彼らの戸外生活が人々との直接的な出会いを基本として構成されていることを示す行動様式の一つであると言えるだろう。そもそも戸外という空間そのものが、すでに述べたようにパールや床屋、外階段や椅子などを用いて、人との出会いを空間的に具現化したものでもある。戸外とは、基本的に出会いの場であり、彼らの戸外生活とは、とにかく人と出会うことなのである。

## 4.2 身体表現

ところで、ジーロや挨拶が、以上のように出会いを重視する行動だとしても、そこには或る疑問が出てくるかもしれない。それは、彼らがわざわざジーロまでして出会った人物と、結局は簡単な挨拶を交わすだけで通り過ぎてしまうなど、その行動の多くはあまりにも形骸的に見えるという点である。無目的なジーロなどせずに、会いたい人物に直接連絡を取って目的を果たしたほうが合理的だろうし、実際、彼らも重要な案件があればそうしている。では、その一方で、彼らがこうした形骸的な行動を続けているのは何故なのか、そこには、どんな意義が隠されているのだろうか。

この問題を考える前に、もう一つ、彼らの戸外行動にかんする指摘をおこなっておきたい。それは、戸外における彼らの非常に豊かな身体性という問題である。一般的にイタリア人は、服装などの外見に気を遣い、多様なジェスチャーや率直な感情表現などの身体表現に富んでいると言われることが多い。しかしそれは、実は、特に戸外での彼らの行動に当てはまるものである。戸内では、すでに述べたように、それほど

服装に頓着していないし、身体表現も戸外に比べれば穏やかになり、俳優のようだとも言われる演技的・誇張的な身体表現は影を潜める。とするならば、この戸外における彼らの身体性とは何なのか。

彼らが戸外では、きわめて注意深く他人を見ているということは、先節でも述べたとおりである。そもそも、戸外が既述のように常に誰かと出会うことを前提にした場であるなら、相手を観察するという行動は不可欠だろうし、さらにこの行動は、当然、他人に見られていることと表裏をなす。そして、この見られているという意識は、決して受け身のなものではなく、見せるという能動的な行為にもつながっている点に注意したい。それは、具体的にはまず、自分の服装をはじめとする外見に対する配慮という形で表面化しており、Eもその例外ではない。

ただしEは、服装に関しては、明らかに服装に気を遣っている他の多くの人々に比べると、一見、何の頓着もしていないかのよう見える。Eの服装は、たいてい上下とも灰色か紺色の作業着風のもので、パン屋という職業柄、小麦粉にまみれていることもある。しかし外出するときは、必ず作業用のエプロンを脱いで、鏡の前でさっと髪の毛をなでつけてから作業場を離れるし、仕事のない午後となれば、外出前にシャワーを浴びてこざい服装に着替える。そして彼の外見へのこだわりとは、服装以上に、姿勢をはじめとする身体表現への関心として表われている。

たとえば、町の人々が面白半分に関心するEの物まねをするとき、両手をズボンのポケットに突っ込み、胸を張るような格好をしてみせることがあるが、これはEが広場で一人にいるときのおさまりのポーズである。彼は背が低いから、そうした姿勢で太った腹を目立たせて身体全体を大きく見せようとしているのだ、と人々は言う。その真偽は不明だし、その姿勢はEの単なる癖かもしれない。しかし、このほかにも、大股でリズムのある歩き方や、通りかかった車を止めて話しているときのウィンドーへの手のかけ方、パールの店先におかれた椅子に腰掛けるときの座り方等々、彼の姿勢や仕草には、ある種の誇張や演技性が見てとれる。また筆者は、R町の他の男性に関しても「あいつがいつも左の頬を見せて壁に寄りかかっているのは、その角度が一番見栄えがよいと思っているからだ」等々、広場にいる男たちのポーズに関する噂話をしばしば聞いたことがある。その口調には、Eの場合と同様、揶揄が込められていることにも配慮しなければならないが、いずれにせよ、彼らが戸外では自分および他人の外見に大きな関心をもっていることは間違いないだろう。

また表情に関しても、Eは一人で広場に入ってくるときは無然とも言えるような無表情だが、誰かが彼の前に現われた途端、その相手や状況に応じた表情が鮮明に出

現する。しかもその表情は、対面中、誇張気味に活発に変化することが多く、彼の感情をそのまま表しているというよりも、相手の注意を引きつけようとする意図や効果を持っているとも言える。そのことは、彼の目および視線にもっとも端的に示されている。目配せが彼らの挨拶になっていることはすでに述べたが、Eはお喋りの中でもしばしば相手の目を凝視し、相手の視線を自分から離さないようにする。相手が、何かの拍子に視線をそらすと、すかさず身体ごと向きをかえて目を合わせ、視線を戻そうとすることも多い。

そして会話中、こうした視線の捕捉行動とともに目立つのが、活発な身振り手振りである。Eは広場にでかければ、ほどなくして話し相手を見つけ、おしゃべりを始めるが、そのとき彼の身体は忙しく動き出す。相手に対して手を広げたり振り上げたり、さらにはいわゆる狭義のジェスチャーを多用したりする。もちろん、「お調子者」といわれるEには、こうした身体表現がことさら目立つとも言えるが、程度の差こそあれ他の人々も同様である。また、その動きが相手の動きに合わせているかのようにも見えることも興味深い。相手の動きや声が大きくなれば、Eも相手の話が終わらないうちから身を乗り出し、さらに大きな身振りをして声も大きくしていく。その一方で、いつの間にか会話が止まると、互いの動きも止まり、通り過ぎる人を眺めながら共にたたずんでいたりする。つまり彼らの会話とは、言葉だけでなく全身を用いた相互行為なのである。

さて以上からは、基本的に戸外という空間そのものが、身体性の発動する場であることが浮かび上がってくるだろう。たしかに彼らの身体性は、直接誰かに対している時にいっそう豊かに発揮されるが、服装への関心に典型的に見られるように、戸外にいること自体が、彼らの身体への関心を強くかき立てていることは間違いない。そして、ここでいう身体への関心が、服装、姿勢、表情、身振り手振りをはじめとして、外見という人と人とのインターフェイスにかかわる問題であることに注目するならば、そうした豊かな身体性自体が、先述のジーロや挨拶行動と同様に、戸外が出会いの場すなわち対面的な関係の場であることの証左であるとも言える。そもそも身体とは、人と人との対面性そのものであると見なすこともできる。彼らは戸外で、それぞれの身体を通して、対面的な関係の地平を活性化させ作り出しているのである。

また、このことは、彼らの社会的な存在のあり方、少なくとも戸外での存在のあり方と密接に関わっていることも指摘しておきたい。実際、彼らの人に対する評価や見方は、その内実よりも外見によって左右されることが多い。彼らが積極的に評価している人物の多くは、Eのように盛んにジーロをして、多くの人と出会い、その出会い

の場で活発な相互行為を展開し、自分をいかによく見せるかに成功している者である。

もちろん、戸外での振舞いがすべて各自の思いどおりに評価されるわけではない。先述の「広場の男」という言葉も、広場に出かけてばかりで実質的には何もしていないという否定的な意味で使われることも多い。しかし、社会の中で最低限の存在が認められるためには、少なくとも戸外に出る必要がある。たとえば、R町にも戸外生活を好まない者は少なからずいたが、彼らは、良い職につき教養もあり信頼もおけるなど、いかに評価に値する人物であろうとも、日常的にはほとんど話題に上らず、社会的な存在としては無きに等しかった。逆に、戸外での露出が多い人物に対しては、その内実にかかわらず、基本的には積極的な評価が与えられていた。或る人物がいつも以上に外に顔を出すようになると、それだけで「あいつは一角の人物になった」と噂になったこともあった。つまり彼らは、少なくとも戸外においては、互いの存在を、皆の目の前に具体的に現われる人物として認識し評価していると考えられるのである。

とするならば、戸外とは、こうした意味での自他の存在が、以上のような対面的な行動を通して社会的に開示され評価される場であるとも言えるだろう。本節の冒頭で筆者は、彼らの戸外での出会いがあまりにも形骸的であるという問題を提起したが、その意義の一つは、ここにあるとみなすこともできる。

そしてここからは、彼らの主体のあり方そのものが、本質的に対面的な形態を持っているという議論が導き出されるかもしれない。主体とは、これまで一般的に、いわゆる近代的自己を範型として、それ自体で独立し完結したものとして論じられることが多かった。しかしイタリアの場合、少なくとも戸外における彼らの存在のあり方は、常に相手との関係の中で現われ、ゆえに常に相手を必要とする存在として設定されていると考えられる。これは近代的な主体とはまったく異なるあり方である。したがって、こうした主体のあり方を積極的に評価していくことができるならば、これまで「無秩序」としてしか形容できなかったイタリア社会全般を本格的に再考するための重要なきっかけになるとも推察されるが、これについては、次章でまとめて論じていくことにする。

### 4.3 キアツキエラ

さて、これまでジエロなどの行動様式に注目して、戸外には対面的な関係性によって形作られている地平があることを示唆してきたが、戸外にはもう一つ、注目すべき

行動様式として、お喋りがある。お喋りとは、当然、話し手と聞き手という対面的な関係のなかで成立するものである。ゆえに、それもジーロ等と同様、容易に対面的な行動様式として位置づけられるだろうが、さらに考察を進めていくと、そこからは、この対面的な関係が、実は本稿の冒頭であらかじめ触れた「〔他者〕同士の関係」として言いかえられることが浮かび上がってくる。では、「他者」同士の関係とは何のことなのか、早速、彼らのお喋りの具体的な様子から考察を再開していくことにしよう。

すでに何度か述べたように、戸外とは、ジーロや挨拶などの場であるとともに、お喋りの場でもある。もちろん彼らは、出会った人すべてと話をするわけではないが、それでもイタリアの町では、彼らが広場や路地のあちこちで喋っている姿を容易に見つけることができる。しかも彼らの話し好きは、特に戸外で観察される特徴であって、同じ人物が戸内では無口になってしまうことも少なくない。そしてさらに興味深いのは、彼らが、大して内容のある会話をしているわけではなく、信憑性も疑わしい話を好き勝手に言い合っているように見えるという点である。彼ら自身、そうした会話をキアッキエラ *chiacchiera* という言葉で表現している。キアッキエラとは、まったくの嘘（ブジア *busia*）ではないが、信憑性も重要性も低く、いわば暇つぶしのために行われるような話を意味する。

では、にもかかわらず、何故、彼らは戸外でキアッキエラを行っているのか——筆者はすでに同様の疑問から彼らの会話状況を詳しく考察したことがある（宇田川1993）。まず注目すべきは、一見内容がないようにみえるキアッキエラの意義とは、その発話内容ではなく、発話行為そのもの（とにかく発話するということ）にあると考えられるという点である。確かに戸外での会話の内容がすべて空疎なわけではない。先のEに関する描写の中でも述べたように、特に他人の動向に関する噂は、きわめて重要な情報源として認識されており、それは彼らの戸外生活の目的の一つになっている。また彼らは、職探しなどのより実際的な情報も、戸外での会話の中から得ている。ただし、その場合でさえも、彼らとその発話内容を信頼しているわけではないことに注意したい。彼らは、相手が誰であっても、戸外で聞いた話は基本的に疑うという姿勢を貫いている。彼らにとっては、いかなる情報も、誰が、どんな状況下で、いかに語っていたのかという具体的な文脈を持っており、むしろ、これらの文脈こそが重要であるからである。これは、彼らの発話内容が、常に発話行為として解釈されている証でもあるだろう。

そして実際、彼らの会話状況を詳しく見てみると、聞き手のみならず話し手でさえ

も、そこで話されている内容には一義的な重きを置いていない様子が明らかになってくる。筆者は先述の拙稿でも、具体的な事例とともに、話し手が相手の反応いかんに関わらず自分勝手に話を繰り広げている状況を考察したが、先述のAの抗議やEについても同様に考えることができる。実はEは、R町の中でもとりわけ「お喋り（キアッキエローネ *chiacchierone*）」のひとりとして知られる人物である。彼は会話中、たいていはひとりで喋りまくり、相手にはあまり関心を示さないが、相手も「あいつはキアッキエローネだから」と、彼の話を実際には聞くことは少なかった。このため、外部から見ると、両者の間には果たしてコミュニケーションが成立しているか不安になったほどだが、E自身もそうした不安を感じているせいか、会話中、頻繁に全身で相手の注意を引こうとはしていた。しかし、彼にとっても、そうした発話内容の伝達以上に重要なのは、とにかく話すことであつたと考えられる。また聞き手側も、その内容がいかなるものでも、Aの事例に典型的に見られるように、話し手の話すという行為自体を否定することはなかった。キアッキエラとは、何を話しているのかという発話内容以上に、とにかく話しているという発話行為が重視される発話なのである。

しかし、このことは、だからといって彼らの発話行為には相手が必要ないということの意味するものではない。むしろ、発話が発話行為として成立するためには、相手は、どんなに形骸的であっても不可欠となる。彼らの発話は、たしかに一見、極端なモノローグのように見えるが、必ず誰かに対して発せられるものであり、その意味では、彼らは常に話し相手を欲していると言える。先述の拙稿の冒頭で筆者は、R町のメインストリートで大声で独り言を言いながら歩いている女性（彼女も有名なキアッキエローネの一人）の事例を取り上げたが、彼女も周囲の人が自分の声を聞いていることを想定していた。またEやAも、会話中、相手の気を引こうと視線や身体全体を使っており、さらには、相手が複数の場合であっても、特にそのうちの一人に集中的に話しかけるような姿勢をしばしば見せていたことは興味深い。彼らは、どんな形の会話であれ、形式としてはダイアログ様式をとっているのである。

ただし、彼らの発話が、既述のように発話の内容ではなく行為そのものとして意味づけられているとするならば、そのダイアログの相手とは、発話内容を理解する相手ではなく、発話行為を成立させるための相手として設定されていることに注目する必要がある。前者のように発話を受けてその内容を理解しうる相手とは、あらかじめ話し手と認識体系を共有している（と想定されている）いわば既知の相手である。これに対して、後者のように発話行為を成立させるためだけの相手には、その内容の理

解は少なくとも一義的には求められていない。その際の相手は、話し手が「わたし」として発話行為をなしうるための「あなた」であればよく、既知であるか否かは関係ないというよりも、そうした問題とは別の次元での相手としてみなされていると言ったほうがよいだろう。とするならば、この場合の話し手と聞き手、すなわち「わたし」と「あなた」とは、互いに世界を共有しないという意味での「他者」同士であるということもできる。そこでは、そうした「他者」同士であることが、少なくとも許容されていると考えられるのである。

実際、ここで言語学一般の議論を参照してみると、そもそも発話における「わたし」と「あなた」という人称詞は、一般的に見ても、非常に興味深い語であると言われている。

まず、両者はともに、他の語のように特定の個別化された実体的な指示対象を持つ語ではない。たとえば「わたし」とは、それをを用いる者（話し手）を指示する言葉として皆に使用されているが、だからといって「わたし」と言う者すべてが、実体的にその指示対象とされることはないからである。しかし、もちろんこの語の指示が不確定なわけではなく、「わたし」という語で指示される多くの「わたし」から、あやまたずにこの「わたし」を指示することができる。とするならば、「わたし」が指示しているのは、この語を用いている多くの「わたし」のうちの一人名ではなく、「このわたし」という次元の「わたし」ということになる。ここにこそ、より根元的な主体性の所在をみいだす研究者も少なくない<sup>21)</sup>。「このわたし」とは、他の多くの「わたし」ではなく、今ここで話している「わたし」、すなわち、かけがえのない唯一の「わたし」という感覚であるとともに、「このわたし」がなくなれば「世界」も消えてしまうという意味では、同時に「この世界」そのものの根拠でもあるからである。つまり、「わたし」という人称詞が開示しているのは、それ自体が「世界」そのものでもあるという意味では独我論的で、それゆえ始源的な主体性であると考えられるというのである。

そして、本稿の議論にとってより重要なのは、こうした独我論的な唯一の「わたし」が、にもかかわらず決して自律的に存在する主体ではないという点である。「わたし」という人称詞が常に「あなた」を必要としているように、「このわたし」もまた、常に「あなた」を必要とし、「あなた」との関係の中でのみ発現する。しかも「わたし」は、相手の発話の中では「あなた」となり、そのとき「あなた」は「わたし」になることから分かる通り、「あなた」と「わたし」とは相補的かつ反転可能な語でもある。このことは、「あなた」が、発話の場においては（三人称の「彼／

彼女」とは異なって)「わたし」と同様に主体的に話を発しうる存在、すなわちもう一人の独我論的主体として設定されていることを意味する。とするならば「あなた」とは、「わたし」による把握や所有の域を超えた「他者」であると言うこともできるに違いない。

さてこのことは、もちろん、あくまでも言語学の次元における一般論、しかもきわめて原理的な一般論である。したがって、以上のような「わたし—あなた」関係、すなわち、対面的に生成されながらも各々が十分に主体的であり、それゆえ互いにとっては「他者」同士であるという関係性とは、原理としては、キアッキエラのみならず、どんな発話においても見出されるものである。ただし、既述のようにキアッキエラが、他の発話以上に「わたし」と「あなた」のダイアログ形式を重視していることを思い出すならば、それは、まさに以上の関係性を形式として結晶化させた話であるとは言えないだろうか。キアッキエラの場面では、人々は互いに、話(の内容)が通ずる相手か否かではなく、とにかく「わたし」と「あなた」として振舞うことが期待されていることは先に述べたとおりである。キアッキエラの中核をなしているのは、「わたし—あなた」という、互いの認識には回収されない「他者」同士という関係性であると考えられるのである。

そしてこのメカニズムは、実は、これまで指摘してきた挨拶、ジーロ、豊かな身体表現などの対面的な行動様式にも見いだされる。そもそも対面的な関係とは、厳密に言えば、互いに対面しているときだけに成立するものである。ゆえに、その関係における自他の存在もまた、原理的には、その瞬間にのみ相手に対して何の媒介もなく出現するものとして設定されていることになる。それはまさに、互いの認識や表象化を越えうる契機を内在した「わたし」と「あなた」の関係である。

とするならば、イタリアの戸外とは、これまで見てきたようにキアッキエラ、挨拶、ジーロ、豊かな身体表現などの対面的な行動様式に覆われることによって、以上のような「わたし—あなた」関係、すなわち「他者」同士の関係によって形式化されている地平を有していると言えるのではないだろうか。つまり彼らは、戸外では、これらの行動様式を通して、互いに「他者」同士として振舞うことが形式付けられているのであり、こうした「他者」同士の関係という形式こそが、彼らの戸外行動の基盤となっていると考えられるのである。前章で詳述したAの執拗な抗議行動が成立し認められていたのも、この地平においてであったに違いない。

もちろんこの場合、「他者」同士とはいっても、それは社会的な形式としての「他者」であって、その「他者」性の原理が実質的に発現しているか否かは別問題であ

る。戸外とは、あくまでも社会的な場である。ゆえに、そこで「他者」同士の関係が展開されているとしても、その「他者」とは、彼らが戸外で扮しているいわば社会的な役割（いわば仮面）であると見直す必要がある。たとえば実際に戸外で人々が対面する際には、必ずや相手に対する認識や判断が関与し、その関係は本質的な意味での「他者」同士の関係とはならないだろう。しかしながら、前章のAの事例でも述べたように、そのことと、彼らがとりあえず「他者」として戸外で向かい合っていることとは次元が異なる問題である。本稿は、この後者の次元でのいわば形式的な「他者」関係に注目し、それを積極的に評価しようとした論考である。イタリアの場合、この関係性は、すでに見てきたように戸外における数多くの対面的な行動様式によって形式化されることによって、社会の中に明確に位置付けられている。とするならば、たとえそれが形式にすぎなくても、我々はこの地平の存在により積極的に注目していくべきだろう。そして、この地平の存在は、彼らの社会に何をもたらしているのか、そもそも互いに形式的に「他者」として振舞うという関係とは、一体どんな意味を持っているのか等々、そこからさらなる考察が広がっていく。

## 5 「他者」同士の関係

### 5.1 共生の場としての戸外

以上筆者は、イタリアの戸外で展開されている彼らの行動を、オークショットのソキエタスという概念に触発されつつ形式性という視点から検討してきた。その結果明らかになってきたのは、彼らの戸外での行動は徹底した対面的な様式に貫かれており、そこには、（正確に言えば形式としての）「他者」同士の関係の地平が見出されるということであった。

この議論は、すでに何度か触れてきたように、単に彼らの戸外生活に新たな解釈を提起するばかりではない。イタリアの戸外生活とは、彼らの社会全体の中できわめて重要な位置にあるため、その再考は、当然、社会全体に対する理解にも影響を及ぼすと考えられる。特に従来の「無秩序」なイタリアというイメージは、この視点を積極的に導入することによって、根本的な修正を迫られることになるかもしれない。そしてさらに重要なのは、この関係性をこれまで看過してきた研究者側の問題である。したがって我々は、この「他者」同士の関係という問題を、これらのより広い文脈に位置づけてあらためて考察していく必要があるだろうが、残念ながら筆者はまだそのす

べてを十分に議論する段階には至っていない。ゆえに本稿では、以降、戸外生活にかんする再検討を中心に今後の課題を提起することによって考察を終えることにする。

彼らの戸外行動とは、すでに2.3で詳しく述べたとおり、これまでは、せいぜい、個人的な利害のために様々な人間関係を操作しようとする行動として議論されるにとどまっていた。これに対して本稿は、人々がとにかく戸外に出ていくという、従来あまり顧みられなかった側面に着目して、そこに既述のようなまったく別の地平が存在することを指摘してきたわけだが、では、その議論をふまえて彼らの戸外生活を描き直すならば、どのような像が浮かび上がってくるのか。

そもそも、この「他者」同士の関係とは、「わたし」と「あなた」という人称関係に即して論じてきたように、相手を、私の側の主観によって一方的に表象化された人物ではなく、むしろ表象や認識の域を超えた「他者」と見なしてかわっていきこうとする関係である。それは、相手の主体性をそのまま認める態度でもあり、そのとき私も、相手から「他者」と見なされ、その主体性を全面的に認められることになる。ただし、それゆえに、ここでいう主体性は常に「他者」たる相手を必要としていることも忘れてはならない。つまり、互いが互いに他に比類なき「他者」として認めあうことを通じて、自らの主体性をも十全に発現していくことが、この関係の原理的な機制なのであり、この原理を形式化したものが、戸外での「他者」同士の関係なのである。

とするならば、イタリアの戸外生活の意味とは、まず第一に、各々の行為者にとっては、以上のような自らの主体性の表出にあると考えられる。彼らが戸外に出てより多くの人と接触しているのは、単なる無為でも、あるいは実利的な目的のためだけでなく、自らを人々の面前で表出し主体性を発動させるためでもあるということ、既に本稿でも指摘したとおりである。

もちろん、こうした自己の表出という問題は、個人の心理的な問題であって社会的には意味がないようにもみえるかもしれない。しかしそれは、決して些細な問題ではない。実際、彼らは既述のように、実質的には何の成果がなくとも、戸外で様々な自己主張や自己宣伝を執拗に繰り返している。3.1で述べたAの抗議行動は、その典型的な一例である。彼女は、戸外ではあだ名ではなく「A」という固有名詞、つまり、とりあえずは表象化を超えた「他者」として遇されていたわけだが、彼女自身もまさにその機制を用いて積極的に主張を行っていた。近年のデモ行進などの示威行動の背景にも同様の地平があると考えられる。彼らにとっては、戸外に出かけて皆の目の前で自らを主張するという行動は当然のことであり、むしろ、彼らが彼らなりの主体性を発動させるためには必要であるともいえるだろう。

そして、この主体性の発現には常に相手が必要であるという先の議論をさらに進めていくなれば、戸外とは、単なる自己主張の場ではなく、そのためにも互いに「他者」として認められた者たちの場としても浮かび上がってくる。戸外は、すでに述べたように、人々が互いに「他者」として向き合うことが形式付けられている場である。このことは、彼等が戸外では、この「他者」同士という形式にしたがう限り、実質的に何をしても何を言ってもかまわないことを意味する。つまりそこは、みな「他者」として自らを主張しあうことを許容されている、いわば公共的な場であると言えるのである。

この観点は、彼らの戸外生活に、従来の「無秩序」論とはまったく異なった見方をもたらしめていく。例えばR町でも、人々は常日頃は戸外で勝手なことをしゃべっているが、町の政治にかかわる問題などが具体的に出現すると、急に戸外のあちこちでその問題について議論が交わされる様子がしばしば見られた。あるいは、誰かの問題提起が町中に論争を引き起こすこともあった。先述のAの事例も、Aが自分の評判にかんする問題を提起して、皆がそれについて意見を開陳して話し合っているという点に着目するならば、同様に考えることができる。これらは、広い意味では「公論」であるとも言えるだろう。

そして、こうした彼らの活発な議論は、当然、組織化されることによって、しばしば社会全体の政治に密接に関わっていく。冒頭で述べた社会運動の隆盛は、その典型的な例である。近年イタリアでは *associazionismo* (アソシエーション主義) という言葉がよく聞かれるほど、様々な主旨のもとで数多くのアソシエーションが自発的に作られつつある。R町でも、ここ数年、政治的なものから、女性問題、移民問題、教育問題、若年の失業問題、高齢者問題、新興住民の問題等々まで、多くのアソシエーションが次々に生まれ、しかも、それらのほとんどが、それぞれの問題を抱えている当事者による組織化であった。本稿ではその詳細を論ずる余裕はないが、そこにはいづれも、当事者たちが以上のような地平を利用して自己主張をしながら組織化を行っている様子を見てとることができる。

もちろん、かつてこの地平は存在し、組織化という営為も行われていたと考えられる。たとえば先述のEが、中断されていた聖アントニアオ信徒会を復活させたのも、単なる信仰心からではなく、或る政治的な野心があったためである<sup>22)</sup>。従来は、この事例のように、主に中堅の男性たちが政治的力を得ようとして、政党や信徒会などの既成の組織を利用して自己主張や組織化をすること多かった。しかし近年は、急激な社会変化によって、人々の問題関心のみならず利用しうる組織形態も多様化・増

大し、いっそう多くの多様な人々が様々な主張を展開するようになったため、以上のようなアソシエーションの乱立状況が起きていると推察される。いずれにせよ戸外とは、人々がその時々々の社会問題に対応して直接的に社会に訴えかけ動かさしめる場として積極的に使われ続けているのである。

また、ここには、イタリアにおける社会的統合という問題も浮かび上がってくるだろう。彼らの戸外での行動は、たしかに公共的とはいえ、既に述べたように各人の自己主張を基本としている。このため、その場での議論は容易に全体の合意には至らず、むしろ社会全体のまとまりを脅かす結果につながりかねない。R町でも、戸外での議論はたいてい何の解決策や進展も生まずに混乱を招いているだけのようだった。

しかしながら、近年の公共性をめぐる一般論でも、合意だけが互いの共生に至る道なのか、あまりにも安易な合意の追求にはむしろ問題があるのではないか、という指摘がなされている<sup>23)</sup>。それは、合意という観念が、みな意見と同じくするという社会の同質性につながりやすく、その場合、自分たちと異なるものを抑圧し排除する論理へと容易に移行してしまうからである。これに対して、以上のようにイタリアの戸外にあらわれる公共的な場とは、何度も繰り返してきたとおり、自己の主張のためにも形式的には互いに「他者」として振る舞うことが要求される場である。それは、まさに「他者」たちの場であり、とするならば、彼らは、戸外ではそれぞれの異質性を否定されることなく共生していると言うこともできるだろう。もちろんその共生意識は、同質性や共通性を前提とする「われわれ」意識とは根本的に異なるものであり、したがってそこからは、明確な外縁のもとで単位化して全体化するという社会モデルは浮かび上がってこない。しかし彼らは、少なくともこの地平では、互いに「他者」同士として異質のまま共生しており、これもまた社会のあり方の一つとして考えることもできるのではないだろうか。こうした社会結合のあり方が、先述のオークションのソキエタス的な社会モデルに通ずることは言うまでもないが、いずれにせよこのことは、これまでまとまりがないとされてきたイタリア社会のあり方を、根本的に見直さなければならないことを意味している。

## 5.2 「無秩序」とは

とはいえ以上の考察は、戸外における「他者」同士の関係という形式について、特にその理念的な側面を強調したものであって、ゆえに過大評価した嫌いがあることも、今後の議論のためにあらためて付け加えておく必要があるだろう。

たとえば、彼らの戸外生活にはたしかに共生的な形式が見られるが、実際には誰も

がそこで自己を主張できているわけではない<sup>24)</sup>。筆者はこれまで、戸外における男女の空間的な分離に関しては、両者に同様の行動様式が見られるため一括して論じてきたが、だとしても、戸外が性によって二分化されていること自体を問題にしていく必要がある。現在でも、男性と女性が戸外の同じ空間に混在することはほとんど見られない。

また、そもそもの「他者」同士の関係自体が、あくまでも形式であるということも忘れてはならない。たしかにこの関係は、形式だからこそ以上のような効力があるとも言えるが、それは同時に、その理念が常に現実化されるとは限らないことを意味している。そして、実はこのことが、みなが自分勝手に行動している「無秩序」なイタリア社会というこれまでの印象に密接に結びついている。

実際、「他者」としての自己主張は、それが形骸化して相手の「他者」性への配慮が減じていくなれば、容易に単なる自己主張となってしまうことは、すでにキアッキエラの記述などからも明らかである。そのとき相手は、否定や排除はされないにしろ、「他者」として尊重されることもなく、往々にして自分の主張の受け手としてしか見なされなくなってしまう。したがって、4.2で積極的に評価した人と人とのインターフェイスに現れる対面的な自己というあり方も、結局は、自分勝手にイタリア人というイメージに容易につながっていく。

また、Aの事例でも指摘したように、たとえこの関係の地平で相手を「他者（固有名「A」）」として遇することができたとしても、そこから、相手に対する対象的な見方（あだ名「チポッラのA」）を完全に消し去ることはできないという問題も存在する<sup>25)</sup>。両者は原理的に異質であるとはいえ、実際には二重化しており、ゆえに必然的に影響関係にある。しかも、この「他者」という存在のあり方が、先にも若干触れたように、原理上、直接的な対面の場でしか出現しないのならば、その実質的な影響力はほとんどないと言わざるをえないだろう。Aの場合も、いくら彼女が戸外で活動しようが、彼女に対する評価はほとんど変わらなかった。そして、そもそも互いに「他者」であるということ自体が、原理的には、両者は永遠に理解しあえないことを意味しているかもしれない。わたしが相手を「あなた」として見出したと思った途端、「あなた」は容易に表象化された他者になってしまうからである。この関係性は、本来的に成立不可能な関係であり、ゆえにそれがいかに形式化されたとしても、はじめから挫折を内包している関係であることも否定できないのである。

さてこうしてみると、「他者」同士の関係という地平の存在は、イタリア社会の「無秩序」性を強化しているだけのようにも見える。しかしこのことは、裏を返せば、

この地平がイタリアの社会全般にいかん浸透しているかの証左でもある。実際、2.3で述べたとおり、イタリア社会の最大の特徴の一つは、個人的で操作的な社会関係が支配的であるという点にある。彼らは、各自の利害にしたがって時には相手を騙してまでも駆引や取引を積み重ねながら生活しており、そうした社会関係の個人的な操作は、フルボ等の民俗概念によって積極的に評価されていた。しかし、それらの行動は、具体的には各自が直接的に対面する場でおこなわれていることを思い出すならば、それは、本稿でこれまで指摘してきた「他者」同士の関係という形式にのっとった行動としてもう一度論ずる必要も出てくる。つまり、イタリア社会における社会関係の操作性の高さとは、たしかにしばしば「無秩序」という印象につながっていくとはいえ、以上のような「他者」関係の形式性を前提とし、それを積極的に利用した結果の一つとして見直していくこともできるのである。

またこのことは、「他者」同士の関係という地平が、決して物理的な意味での戸外空間に限定されるものではないということにもつながっていく。実際、近年、彼らの戸外生活は、生活様式の変化とともに縮小されつつある。交通の発達や通勤圏の拡大等によって通勤時間が増えたり、価値観の変化によって家族と過ごす時間がいっそう増えたりして、男女ともに戸外で過ごす時間は減少している。戸外に出かけること自体が古くさいと嫌われるようにもなった。しかしながら、なるべく多くの人々と直接的に出会おうとする行動はそれほど変化していない。彼らは自動車や携帯電話等を用いて、暇さえあれば連絡しあって互いの家や職場を訪れているし、最近では集会用に整えられた公共の建物などが、広場や路地の替わりになっていることも少なくない。場所は変わっても、その関係性自体は現在でも十分に展開されているのであり、彼らにとって重要なのは、戸外という空間ではなく、この関係性の地平そのものなのである。ただし、だからといって物理的な戸外の意味も皆無とはなっていないことは、冒頭のデモ行進の事例を参照していただきたい。

### 5.3 もう一つの付言

以上、「他者」同士の関係という地平に積極的に着目することによって、彼らの戸外生活に新たな見方を導入するとともに、イタリア社会には、通常は自己中心主義的な自己表出が支配的であっても、原則的には共生しうる地平が存在することを、多少ともなり具体的に示してきた。また、この地平こそが、本稿の出発点であった近年の社会運動の隆盛をはじめとして、単に「無秩序」という形容だけでは把握できない彼らの社会的な活力や適応力の高さへとつながっていると考えられる。ゆえにそこから

は新たなイタリア研究の方向性が浮かび上がってくることは間違いないが、さらなる考察は今後へと引き継いでいくとして、ここでは最後に、この「他者」同士の関係という関係性そのものについて、より一般的な観点から若干の付言をしておきたい。

この関係性とは、これまでの行論からも明らかなように、いわゆる近代的な社会観とは根本的に異なっており、ゆえに、いまだ近代的思考に呪縛されがちな社会理論一般に対しても根本的な再考を迫るものである。ただし、近代批判という試み自体は既に数多く行われており、もはや目新しいものではない。とするならば、本稿の議論は其中でどんな位置付けにあるというのだろうか。

そもそも近代的な社会観とは、簡単に言ってしまうと、社会をなんらかの共通性や同質性をもつ全体として想定し、個人をそこに直接的に統合していかうとする考え方である。ゆえに個人は、その場合、全体を構成する部分として規格化されることになる。いわば社会化された個人である。こうした社会観は、先述のオークショットの言葉を用いればユニバーシタス的であるとも言えるだろうが、ほかにも、たとえば酒井は、その特徴を「種的一同性」という言葉で指摘している（酒井1996）。また、近代といえどももちろん、近代的な主体という、社会から自律した自由な存在としての個人という考え方も存在する。しかし、この近代的主体も、実は決して自由な存在ではなく、個人が自ら進んで社会体制を内面化するように近代社会によって作り出された権力装置であることは、フーコーが喝破したとおりである。

とするならば、より根源的な問題とは、社会であれ個人であれ、我々が余りにも一つの全体という観念に囚われている点にあると考えられるに違いない。そして実際、こうした批判に基づいて、それ以外の社会観を模索するという作業もすでに進んでいる。

たとえば酒井は「種的一同性」に対して「関係的一同性」という言葉を用いて、個人を親族関係、性差関係、主従関係等々、錯綜した関係の束とみなし、そうした個人の関係の連鎖として共同体を想定しようとする考え方を対峙させた。また、その議論をさらに発展させて、「生活の場における臨機応変の隠喩と換喩の変換によるアイデンティティ」（小田1996:122）という考え方を指摘した小田の議論も興味深い。彼は、レヴィ＝ストロースの「プリコラージュ」の概念を用いて、臨機応変にちぐはぐにつながれていく共同体を描き出したが、それもけっして一つの種的一同性全体につながることはない社会観である。また個人という観念に関しても、間主観的主体や間身体的主体などの言葉に代表されるように、近代的な自立する自己という考え方を批判して、自と他との関係性に積極的に着目しようとした議論はすでに長い歴史をもってい

る。さらに近年では、主体ではなく行為体という言葉が使われ始めているし、アイデンティティ概念に関しても複合的アイデンティティなどの用語が駆使されるようになってきた。これらも、個人というあり方を、一つの全体でも、全体の部分でもないものとして捉え直していこうとする試みである。

ところで、こうした議論の流れにおいて、本稿で指摘した「他者」同士の関係という考え方も、たしかに全体化につながらない社会観の一つとして位置づけることができる。しかし、これまでの議論が、酒井の「関係的」、小田の「隠喩、換喩」等の用語に見られるように、人と人との結合を（もちろん同質的な全体化ではないが）やはり互いの類縁性や関連性に基づいて想定してきたのに対して、「他者」同士の関係とは、互いにそうした類縁性すらない結合のあり方として設定されているという特徴をもつ。それは、少くとも形式としては互いに何の類縁性もない「他者」として振る舞うことを条件に互いがつながっていくという結合体なのである。

この関係性の原理がいかなるものであり、どのように成立しうるのかについては、本論で述べたのでここではこれ以上繰り返さない。ただし、この考え方は決して新規なものではなく、これまでもわずかながら論じられてきたということも、ここで指摘しておきたい。たとえば、既述のオークショットのソキエタス論もその一つだが、その最たるものは、彼に大きな影響を与えたといわれるアレントの議論である。彼女は著書『人間の条件』の中で、人間の本質とはその唯一性と複数性にあると論じ、ゆえに本質的に複数であるべき人々（すなわち互いに「他者」である人々）との交わりの中で自らを交換不可能な存在（すなわち「他者」）として現わしていくことこそ、人間の本来的活動であるという政治思想を展開した。これは、まさに「他者」同士という関係性を積極的に評価しようとする姿勢である<sup>26)</sup>。そして、より実証的な論考に目を向けるならば、冒頭でも述べた社交に関する議論にも、同様の関係性を見出しているものが多い。社交とは、互いにどんな人物であるとしても、そのことはいったん棚上げにして、「すべての人があたかもそれぞれ他の人を尊敬するかのごとく振る舞う」（ジンメル 1926: 122）行為だからである。ちなみにソキエタスもしばしば「社交体」と訳されている<sup>27)</sup>。

そしてさらに着目すべきは、近年、オークショットやアレントの再評価や、社交に関する学問的関心<sup>28)</sup>の高まりなど、この関係性への注目度が急に高くなってきているという点である。その背景には、急激に多元化した現代社会において「差異と承認の政治」が困難を極めているという現状が存在する。現在、これまで十分に主体性を認められてこなかった人々が、その承認を求めて起こした「アイデンティティ政治」

は、周知の通り、その過程で互いに自分のアイデンティティだけを主張し抗争を激化させてしまうという深刻なジレンマを抱えている。何故我々は「差異と承認の政治」に失敗してしまうのか、この問いこそ、我々に従来の社会結合のあり方を根本的かつ実証的に見直すことを迫るものであり、その過程で「新たな」視点として浮かび上がってきたのが、この関係性なのである。たとえば多文化主義の論客の一人テイラーによる「対話の網の目」という概念にも、若干のニュアンスの違いはあれ、この関係性と類似の考え方を見出すことができる。

とするならば、本稿でこれまで論じてきた「他者」同士の関係とは、その用語や概念設定等についてはまだ議論の余地があるとはいえ<sup>29)</sup>、人が人と共にいるとは何なのか、人が社会を作るとは何なのか等々の根元的な問い直しを含めて、今後、我々の社会観や社会理論をより先鋭的な形で再検討し、より複雑化する現代社会に対応していくためにも、きわめて示唆的な観点となりうるのではないだろうか。

また、だからといって、この議論が、これまでに蓄積されてきた他の近代批判を否定するものではないことも付け加えておく。本稿の議論は、いわばその第三項に位置づけられるものである。そもそも近代批判の議論とは、それが近代的思考以外の論理として一括されてしまうならば、周知の通り、近代／非近代という二項対立の図式に陥り、結局は批判すべき近代の図式に回収されてしまう<sup>30)</sup>。にもかかわらず、我々はこれまで何度もその轍を踏んできた。ゆえに、そうした悪循環を断ち切るためにも、我々は今こそ、それらの議論を二極の一方に押し込めることなく、議論そのものの多様性、多元性に積極的に注目していく必要がある。「ポスト近代」と言われてすでに久しい現在、我々はまだ我々の想像以上に論ずべき問題を残しているのである。

## 注

- 1) イタリアの全国紙 *Corriere della Sera* 2002年10月28日付記事より。後述のとおり、当時の上院議長 *Pera* の言葉。
- 2) 1992年から、ミラノの老人ホームでの汚職事件をきっかけに、ミラノ検察庁で始まった大量汚職一掃作戦のこと。これを契機に、政財界の癒着体質が根底からゆるがされ、いわゆる第一次共和制の終焉につながった。
- 3) この行進は「イタリアのガンジー」とも言われるイタリアの非暴力運動の創始者の一人 *Aldo Capitini* によって1961年に始められ、以降、原則として毎年行われている。イタリア全国から集まった参加者が両都市間の約25 kmを行進する。
- 4) 「イタリア社会フォーラム」とは、「世界経済フォーラム（いわゆるダボス会議）」に対抗して2001年にブラジルのボルト・アレグレで開催されるようになった「世界社会フォーラム」のイタリア版であり、そのヨーロッパ版が、後出の「ヨーロッパ社会フォーラム」である。いずれも、いわゆるグローバル化に対抗する勢力として組織化されるようになったものだが、イタリアの場合は、2001年のジェノヴァ・サミットの事件がきっかけになっている。
- 5) 2001年7月、ジェノヴァで行われたサミットでは、イタリアのみならずヨーロッパを中

心とする世界各地から反グローバル運動家が約 15 万人集まり、一部が暴徒化し、デモ隊と警官の衝突の末、運動に加わっていた青年が警官の発砲によって亡くなるという事件が起きた。

- 6) 「ジロトンディ Girotondi」とは、正式には「モヴィメント・ディ・ジロトンディ Movimento di Girotondi (人間の鎖の運動)」であり、映画監督 Nanni Moretti による「左翼」の覚醒を呼びかける演説をきっかけに始まった。国営放送局や裁判所など、現在、中道右派政権に脅かされつつあると見なした諸機関を人間の鎖によって取り囲むという運動を行っている。
- 7) 筆者も 2002 年の 9 月末より約 4 週間ローマに滞在したが、反戦や反体制などの様々な主旨の集会やデモを呼びかけるポスターが街のあちこちに張り出されており、日曜日になるとデモの通り道にあたる地区が交通止めになるという経験をした。そして 9 月 28 日には、共産主義再建党が主催する反戦・反現政権の 15 万人規模のデモが主要道路と広場を埋め尽くしている現場を目撃した。
- 8) 特にイタリアでは、日本でも翻訳が紹介されたメルッチを始めとして、Della Porta や Diani など、社会運動に関する優れた研究者が少なくないことは注目に値する。
- 9) 「新しい社会運動」という言葉は、すでに 1970 年代以降、トゥレーヌ等によって使われ始めているが、近年では、さらにそのあり方もまた変容しつつあることがメルッチ等によって指摘されつつある。その変遷については、伊藤 (1993) を参照のこと。
- 10) 筆者の最初の調査時の R 町の概要に関しては、宇田川 (1989a) を参照。なお、本稿で以降、言及する R 町という単位は、行政単位 *comune* としての町ではなく、*paese* という物理的にも歴史的にも或るまとまりを持っている集落単位である。行政単位としての R 町は、*paese* としての R 町の他に、もう一つ、人口約 1,200 人の小集落を抱えている。
- 11) パールとは、イタリアではたいていカウンターだけが設置された狭い空間で、主にエスプレッソコーヒーなどを提供する喫茶店。ただし様々なアルコールもあり、男性たちは、どちらにするか、場面によって使い分けている。また、たいてい入り口付近には、椅子やテーブルが置いてあり、そこでトランプなどをして時間を過ごすことも少なくない。
- 12) 生活空間の性による分離は、イタリアのみならず地中海ヨーロッパ地域では広く見られる現象だが、近年、少しずつ変化もしている。たとえば R 町でも、女性が広場のパールに入入りすることも多くなったし、また、5.2 で後述するように、若年層を中心に戸外生活そのものへの関心が薄れてくると、これまでのような分離感覚も少なくなってきたように思われる。ただしその場合でも、たとえば女性のパールへの出入りは、朝食代わりに利用できる午前中だけに限られる等、少なくとも従来から存続している広場/路地の性による分離には、いまだ本格的な変化は見られない。
- 13) 信徒会とはイタリア語ではコンフラテルニタ *confraternita* と呼ばれる。カトリック教圏において、俗人信徒たちが聖人などの信仰をもとにして、教会の指導を仰ぎながらも自立的に組織したもの。R 町には 2000 年現在で、聖アントニオ、聖ビアジョ、聖バルバラを奉ずる 3 つの信徒会がある。主な活動は宗教催事への参加と教会活動への積極的協力だが、特にそれぞれの信徒会が奉ずる聖人の祭りが、信徒会にとって最も重要な活動となる。E が会長を勤める聖アントニオ信徒会の祭の様子は宇田川 (1994: 5-8) 参照のこと。
- 14) フルベリア *fulberia* (フルボの名詞形) とは、いわゆる「ずる賢さ」を意味する言葉であり、全面的に賞賛されているとは言い難いが、誰かに騙されてフェッソ (あるいはトロッポ・ブオノ *troppo buono*) になるよりは評価される。他人との駆け引きを、いかに自分に有利なように導くことができるか、の指針となる民俗概念である。
- 15) Agulhon は、主に 19 世紀のプロヴァンス社会において、信徒会と同業組合などのアソシエーションのような「形をもったソシアビリテ」と、夜の集いや酒場での集まりのような「形をもたないソシアビリテ」を区別し、後者から前者へと発展していく様子を描き出している。この区別や概念についてはほかにも様々な異論があるが、現在でも非常に示唆的な観点として論議を呼んでいる (二宮 1995)。
- 16) イタリアでは、1958 年制定の通称メルリン法によって、現在、その斡旋は非合法とされているが、個人的なものは、原則、合法となっている。
- 17) 名誉 *onore* と恥 *vergogna* とは、非常に多くの要素が絡み合っている概念だが、中でも性の観念との結びつきが強い。簡単に言ってしまうと、男性は自分に関連する女性の性的行動を管理することが彼の名誉につながり、女性は、男性の名誉のためにも自らの性行動を適切に制御することによって恥知らずという汚名を避けるようにしなければならない。同様の

- 観念は、イタリアのみならず他の地中海地域にも見られる。Gilmore (1987), Peristiany and Pitt-Rivers (1992) 参照のこと。
- 18) たとえばシャンタル・ムフ (ムフ 1998) やリチャード・ローティ (Rorty 1980) 等が、盛んにオークショットの議論を再評価し援用している。
  - 19) あだ名とは、彼らのいう *soprannome* (字義通りには、上に付く名前) のこと。ゆえに、本人の特質などによって付けられるあだ名のほかに、この事例のように、係累を明らかにすることによって当人を特定するようなあだ名も多い。彼らのあだ名に関しては、宇田川 (1989b) を参照のこと。
  - 20) 固有名とは、それがどんなものであっても他の言語体系には翻訳できないように、あらゆる可能世界にまたがって同じ対象を指示しうる語である。このことに最も端的に注目したクリプキ (1985) は、そこには、固有名が最終的には確定記述 (すなわち諸特性の束) に変換しきれないことが示唆されており、したがって、そうした固有名の存在自体が、我々が人や事物を何ものにも代替不可能な唯一の存在と見なす次元があることの証左であると指摘した。
  - 21) たとえば言語学者バンヴェニストは、発話の本質的な機能をその内容の送受信におくという道具主義的な言語観を批判しながら、そもそも発話とは「各々の話し手が自らを主体として設定し、自分の話の中で「わたし」として自ら自身を指し示す」(1983: 244) ことによって可能になると述べ、話は、このように「主体性の表現に適した言語系をつねに含んでいる事実によって、主体性の可能性であり (中略)、主体性の発現を引き起こす」(1983: 248) と指摘した。こうした「わたし」という人称がはらむ問題は、もちろん言語学者のみならず、注 25 でも指摘するブーバー、ダイアローグの思想家とも言われるバフチン、また近年ではアンスコム等、数多くの論者によって、人の主体のあり方だけでなく、人と人との関係性に根元的に関わる問題としても考察が進められている。そしてその議論は、たとえば大澤 (1994) のように社会科学の分野にも強い影響を与えている。
  - 22) E は拙稿 (1994) でも述べたように、隣町の出身者という「よそ者」である。このため、R 町での安定的な社会的位置を得るためにも、また、政治的な活動 (彼は当時のイタリア社会運動党の R 町支部長も務めていた) を進めていくためにも、1976 年、戦後一時中断していた聖アントニオ信徒会を利用したと言われている。
  - 23) 特に公共性に関する議論の火付け役になったハーバーマスの議論について、しばしば合意が重視されすぎているという批判がなされているが、今やそれをさらに超えた議論が理論的にも実証的にも試みられている。その現状については、Calhoun (1993), 斉藤 (2000) 参照。
  - 24) たとえば、戦後、主にローマから移住してきた新興の住民たちは、R 町の戸外空間では「よそ者」として扱われ、この共生関係にはいまだ十分に入ることができていない。このため彼らは、自分たちだけで広場やアソシエーションを作ったりするとともに、それを通じて町全体に参加しようとする運動を繰り広げている。すなわち、誰がこの共生の場に参加できるか否かも重要な論点の一つなのであり、その議論を通して少しずつ変化が見られることも事実である。
  - 25) この問題に関しては、本稿でも論じてきた人称詞の問題から独特の対話哲学を作り上げたブーバーの議論が興味深い。彼は、我々人間の態度とは「我一汝」(本稿の「わたし」と「あなた」の関係) と「我一それ」(対象的な関係) という二つの根源語によって二重化されていると述べて、前者がいかに現前しにくく、後者に容易に変転してしまうかを論じている (ブーバー 1978)。
  - 26) アレントは、思索日記の中で、政治とは「関係的に相違する人々ではなく、絶対的に相違する人々を組織する」(矢野 2002: 62) ものであるべきだとも述べている。
  - 27) また、これらの議論は、会話や対話という営為に関する考察を下敷きにしていることも興味深い。社交論の多くが、会話をその重要な要素と見なしていることは言うまでもないが、オークショットのソキエタスという観念も会話をモデルとしていた。しかも、その場合の会話とは、互いの情報伝達や共通理解を前提とするコミュニケーションとは異なるものであり、見ず知らずの相手や、意見あるいは言語さえ異なる相手であったとしても、また、誤解があつたり儀礼的ではなかったりしても、互いにかかわろうとしている限りにおいては続けていくことができるという意味での会話である。ここに、「他者」同士の関係という地平を見出すことは容易だろう。またアレントも、言論こそ、上記のような人間本来の活動の中心であると強調しているし、後述のテイラーをはじめとする近年の政治思想においても、会話や対話に対する関心が高まっていることは注目したい。
  - 28) 近年、社交という言葉が、たとえば、石井潔『自立から社交へ』青木書店 1998 年、大村

- 敦志『フランスの社交と法』有斐閣 2002 年、山崎正和『社交する人間』中央公論社 2003 年など、和書に限っただけでも、分野横断的に目に付くようになってきている。ここには、社交という関係性に、いわゆる近代的な関係とは異なる何かを見出し、それを積極的に評価しようとする兆しが見える。筆者は今後本格的にこの問題に取り組んでいきたい。
- 29) 本稿で論じてきた「他者」とは、まず、表象化されない他者であるという意味では、表象化された他者との混同を避けるため、「他者」(括弧付きの他者)という表記を用いてきたが、一方、それは、形而上学の分野で論じられ続けている他者問題の問題構制にも近い。しかし本稿の議論は、ある意味では、そうした形而上的な他者問題を参考にしつつも、あくまでも社会関係の次元での他者問題を考察しようとしたものである。したがって本稿の問いとは、普遍的な意味での他者とは何か、ではなく、社会の中で(表象化されない)他者として振る舞うということは何か、であり、この違いを明らかにするために、筆者はしばしば形式という言葉を用いてきた。ただし、他者という言葉は、これまで主に哲学の分野で長い間議論されてきた言葉でもあるため、その形而上的かつ普遍的なニュアンスを払拭することは難しいし、社会的な次元における「他者」もさらに議論を必要とするだろう。今後、より広い視座の中で模索していきたい。
- 30) 近代的思考がコロニアルな論理であることは言うまでもない。たとえば、近代的主体とは、近代／非近代、西洋／非西洋、先進／後進、男性／女性などの二項対立軸を背景にもち、近代西欧が他社会を主体性の観念のない後進社会として他者化する(そして自らを近代として同一化する)装置でもあった。近年、「アイデンティティ政治」が問題視されつつあるのは、これまで主体性を認められてこなかった者たちが単に主体性を得るだけでは、結局、この図式に回収されてしまうことが明らかになったためである。また、このコロニアルな図式の強化に最も貢献してしまった学問の一つが、人類学であったことも付け加えておく。ギアーツ(1991: Ch. 3)に典型的に見られるように、西洋の独立し自律した人格を相対化するために、非西洋の人格のあり方がそうではなく関係的であると指摘した人類学的な論考は多いが、これらもまた、いかにそれが西洋的思考の批判として提出されたものであれ、以上の二項対立図式に絡みとられてしまっている。

## 文 献

- Banfield, Edward C.  
1958 *The Moral Basis of a Backward Society*, Free Press.
- Boissevain, Jeremy  
1966 Patronage in Sicily, *Man* 1: 18–33.
- Calhoun, Craig (ed.)  
1993 *Habermas and the Public Sphere*, Mit Press.
- Colclough, N. T.  
1971 Social Mobility and Social Control in a Southern Italian Town, In F. G. Bailey (ed.) *Gifts and Poison: The Politics of Reputation*, Basil Blackwell.
- Davis, John  
1973 *Land and Family in Pistocci*, Athlone Press.
- Delamont, Sara  
1995 *Appetites and Identities: An Introduction to the Social Anthropology of Western Europe*, Routledge.
- Della Porta, Donatella and Mario Diani  
1999 *Social Movements*, Blackwell.
- Ferrante, L., M. Palazzi and G. Pomata (eds.)  
1988 *Ragnatele di Rapporti: Patronage e Reti di Relazione nella Storia delle Donne*, Rogenberg & Sellier.
- Fusch, Richard  
1994 The Piazza in Italian Urban Morphology, *Geographical Review* 84: 424–438.
- Galt, Anthony H.  
1973 Carnival on the island of Pantelleria, *Ethnology* 12: 325–339.  
1974 Rethinking Patron-Client Relationships, *Anthropological Quarterly* 47: 182–202.

- Gilmore, David D. (ed.)  
 1987 *Honor and Shame and the Unity of the Mediterranean*, The American Anthropological Association.
- Goddard, V. A.  
 1996 *Gender, Family and Work in Naples*, Berg.
- Lindisfarne, Nancy  
 1994 Variant Masculinities, Variant Virginites: Rethinking “honour and shame”, In A. Cornwall and N. Lindisfarne (eds.) *Dislocating Masculinity*, Routledge.
- Moss, David  
 1995 Patronage revisited: the Dynamics of Information and Reputation, *Journal of Modern Italian Studies* 1: 58–98.
- Oakeshott, Michael J.  
 1975 *On Human Conduct*, Clarendon Press.
- Pardo, Italo  
 1996 *Managing Existence in Naples: Morality, Action and Structure*, Cambridge University Press.
- Peristiany, J. G. and Julian Pitt-Rivers (eds.)  
 1992 *Honor and Grace in Anthropology*, Cambridge University Press.
- Rorty, Richard  
 1980 *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press.
- Schneider, Jane (ed.)  
 1998 *Italy’s “Southern Question”: Orientalism in One Country*, Berg.
- Schneider, Peter  
 1969 Honour and Conflict in a Sicilian Town, *Anthropological Quarterly* 42: 130–154.
- Silverman, Sydel F.  
 1965 Patronage and Community: Nation Relationships in Central Italy, *Ethnology* 4: 172–189.
- Tullio-Altan, C.  
 1986 *La nostra Italia*, Feltrinelli.
- White, Caroline  
 1980 *Patrons and Partisans: A Study of Politics in Two Southern Italian Comuni*, Cambridge University Press.
- Zinn, Dorothy Louise  
 2001 *La Raccomandazione: Clientelismo vecchio e nuovo*, Donzelli Editore.
- 芦原義信  
 1962 『外部空間の構成』 彰国社。
- アレント, ハンナ  
 1994 『人間の条件』 ちくま学芸文庫。
- 伊藤るり  
 1993 「<新しい社会運動>論の諸相と運動の現在」『システムと生活世界』岩波講座社会科学の方法, pp. 121–157。
- 宇田川妙子  
 1987 「famiglia と furberia : 南イタリア村落社会の非集团的分析の試み」『民族学研究』51: 50–72。  
 1989a 「イタリアの町社会における家族の社会・文化的意義」『民族学研究』53: 349–373。  
 1989b 「ピラートはデルフィーノか——キャラクター分析に向けて」『社会人類学年報』15: 59–85。  
 1993 「なぜ彼らは喋るのか?——イタリアの一町における言葉・主体・現実」『中部大学国際関係学部紀要』10: 43–61。  
 1994 「『規則』のない社会?——もう一つのイタリア社会像に向けて」『中部大学国際関係学部紀要』13: 1–21。  
 1996 「イタリアの女性——その『強さ』はどこからくるのか」綾部恒雄編『女の民族誌2』弘文堂, pp. 15–40。  
 1997 「ただいま外出中」『月刊みんぱく』1997–8: 15–17。
- 小田亮  
 1996 「しなやかな野生の知——構造主義と非同一性の思考」『思想化される周辺世界』岩波

講座文化人類学第12巻, pp. 97-128。

大澤真幸

1994 『意味と他者性』 勁草書房。

加藤晃規

1985 『場所の広場の成立と展開に関する比較都市論的考察』 加藤晃規。

ギアーツ, クリフォード

1991 『ローカル・ノレッジ』 岩波書店。

クリプキ, ソール A.

1985 『名指しと必然性』 産業図書。

斉藤純一

2000 『公共性』 岩波書店。

酒井直樹

1996 『死産される日本語・日本人』 新曜社。

ジムメル, ゲオルグ

1926 『社会学の根本問題』 大村書店。

ズッカー, ポール

1975 『都市と広場——アゴラからヴィレッジ・グリーンまで』 鹿島出版会。

竹内裕二

2001 『イタリアの路地と広場』 (上・下) 彰国社。

テイラー, チャールズ

1996 『承認をめぐる政治』, チャールズ・テイラー, ユルゲン・ハーバーマス他著 『マルチカルチュラルリズム』 岩波書店, pp. 37-110。

中金聡

1995 『オークショットの政治哲学』 早稲田大学出版部。

二宮浩之編

1995 『結びあうかたち——ソシアビリテ論の射程』 山川出版社。

ハーバーマス, ユルゲン

1994 『公共性の構造転換』 (第2版), 未来社。

バンヴェニスト, エミール

1983 『一般言語学の諸問題』 みすず書房。

ブーバー, マルティン

1978 『我と汝』 みすず書房。

三浦金作

1993 『広場の空間構成——イタリアと日本の比較を通して』 鹿島出版会。

ムフ, シャンタル

1998 『政治的なるものの再興』 日本経済評論社。

メルッチ, アルベルト

1997 『現在に生きる遊牧民』 岩波書店。

矢野久美子

2002 『ハンナ・アーレント, あるいは政治的思考の場所』 みすず書房。

